
格差恋情

桜華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

格差恋情

【Nコード】

N0134X

【作者名】

桜華

【あらすじ】

完璧男子に告白されて、いろいろ余計なことを考える、ネガティブでリアリストな女子の話。

天然属性なし、むしろ空気を読んじゃいます、みたいな。流されるくせに、妙なところで頑固。幸せな結婚を夢見てるくせに、幸せとはなんぞやの哲学ループしてみたり。泰然としてるように見えてビビりまくる。大人な計算と幼稚な行動の、かなりヘタレで頭でっかちなつつとおしい性格の主人公と、あれっ実は似た者同士なんじゃない？（＝話進まないよう…汗）な王子様のまどろっこしい恋愛話の

予定です。

共感できなかったらごめんなさい。

行きあたりばったりで書きますので、途中改稿や修正、設定ミスなどあるかと思いますが、それでもOKな方は読んでいただけると幸いです。

以前R18で投稿してましたが、主人公の性格から、どう考えてもR18にはならないだろうと、こちらに移動しました。R18発生の際には、短編で投稿させていただきます（遠い未来のはず・・・）

お付き合いにいたるまで1

「お付き合いしよう」

何故か100%の自信とともに告げられた言葉は、響子のなかで理解されることなく素通りしていった。

「え…えつと…？」

状況についていけず思考停止状態に陥りながらも、告げられた言葉の余韻を残したままの沈黙の空間がとても恐ろしくて、響子は意味のない言葉を発する。…がその後を続けることが出来ない。

今聞いた言葉はナニを意味するのだろうか？

いや、そのままの意味なら人生初の告白。私にもやっと定番の青春イベント発生なのね、となるところだが…。

おかしい、よね…？

ともすれば、17歳の女子高生にとってオイシイシチュエーションに、理性ではなく軽率な感情が顔をにやけさせるのを必死でおさえつつ、真っ白な頭に現実を認識させようとする。

だって、あり得ない。

目の前にいるそのセリフを告げた彼は、この高校の生徒会長で、学年どころか学校外にもファンがわんさかいるぐらいの、容姿端麗、

成績優秀、スポーツ万能、性格良し、家柄良し、の正にどこの少女マンガのヒーローそのものというテンプレな人で。

もちろん、生徒会といっても何の職務にもつかない定期会合及びイベント時のヘルプメンバーのような存在でしかない響子とは、ほとんど挨拶以外の言葉を交わしたことなどないし。

3年間一度もクラスが一緒になる幸運を享受したことなどないし。

はたまた響子が彼の目を引く程の女性かというと、残念ながら美人でもなければ、人脈の広い人気者でもなく、むしろ人見知り気味の暗めな普通女子なわけで。

響子は、何で冒頭のような発言が彼の口から出てくるのか、全く理解できなかった…。

しかも、あの自信はなに？

まあ、彼の告白を過去に断った猛者などいないだろうけど、それでも響子の気持ちを書くわけでもなく、交際のお伺いでもなく、なぜに、受け入れるのが当たり前のような提案の形なのだろうか…。

と、ここまで考えて響子は一つの可能性に思いあたる。
すなわち、

私に言ったわけじゃなく。たまたま側にいた私の耳に入った。うん、それなら十分納得できる。

それならば、彼が本来告白したかった人物が響子の後ろにいるはずで、完全なお邪魔虫のこの状態をなんとかしなければならぬ。さっさとここから立ち去るのがスマートな対応であろう。

くるり、ときびすを返した響子は、自分が本当にパニックを起こしていたことを知る。

そう、ここは生徒会室で。

会合のない今日は完全に二人きりの状態だったのだ。それは響子が知っていた事実。

再度くるり、と生徒会長へと向き直る。

彼にとつて響子のパニックなど完全に想定内であつたようだ。

にこにことした笑顔は、先ほどの台詞を告げた時とまったく変わらない。ただ、瞳に宿る光が響子の反応を面白がっていることを表しているのみ。

視線が合った瞬間、響子の脳は先ほど言われた言葉を理解する。理解した瞬間、真っ白だった頭は湯が沸いたかのように沸騰し、その熱は響子の顔を朱に染め上げた。

「な、…なん、で…？え、えつと？え…」

おたおたと狼狽をあらわにする姿を見ながら、先ほどの表情を変えない生徒会長の様子に、響子は頭のすみの声がだんだんと大きくなってくるのを感じた。

…これって、冗談だよな？ただからかわれてるだけ。

だったら、狼狽している状態を見せるのはマズイのでは？

後で影から見ている誰かに、いいネタ提供するだけ。

じゃあ、響子は冷静にならなければいけない。

暗めな普通女子が、実は心の底でこんな夢見る乙女の状況を望んでいたなんて誤解でもされたら、非常に屈辱的である。

身の程知らずなどと思われるのは、はなはだ心外である。

だから、この場合の正解は「なんか、冗談にうまくのれなくて、すみません」だろう。

普通の顔をして立ち去るのが一番。

うん。

急速に熱の冷めていく頭のなかで、この事態の解決方法までいくと、響子は口を開いた。

お付き合いにいたるまで2

「響子さん、昨日教室で玲香と僕のこと話してたでしょ？」

響子が多さしく冗談のネタとなることを回避するための捨て台詞を吐こうとしたその瞬間だった。

生徒会長が爆弾を落としたのは。

「へ…？」

そのときの会話に、大いに心当たりのあった響子は、情けない声を上げてまじまじと生徒会長を見る。

背中にいやな汗がつかび、心臓が鼓動をとめる。

そんな響子の様子に気づかないのか、彼は視線をそらす。

頬は赤く染まり、年相応に照れた様子の彼をファンが見たならば、卒倒するものが出そうだ。

「嬉しかったなあ。まさか響子さんと相思相愛だなんて、思ってもみなかったもんだから、そのまま教室に乱入しようかと本気で思っちゃったよ。」

まあ、そんなことしたら玲香になにを言われるかわからないし、ぶち壊しにされそうだから、必死で耐えたんだけどね。

やっぱりさ、告白のときは二人きりがいいし、ゆっくり話したりするには、邪魔のはいらないところがいいじゃない？

今日臨時会合がコアメンバーであっただけで、必死でリスケしちやったよ。」

生徒会長の日ごろのクールで優しげな表情はどこにいったのか、口

はにやけ表情が緩みまくっているのがわかる。
まさに恋する男子の素直な喜びの感情の発露である。
首筋をがしがし掻いているのは、照れ隠しのそぶりなのか。

ま、まずい…。

響子はますます、いやな汗が背中をぬらすのを感じる。

昨日の放課後の会話。

それはいわゆる玲香から持ちかけられた「恋バナ」というやつで。
生徒会副会長というこの学校のツートップの一角を占める響子の親友は、美人で明るい人柄で人気があるにもかかわらず、非常に恋に落ちやすいキャピキャピした性格をしており、彼氏が途切れることなく交代していくまさに青春を100%謳歌している人物で。

そんな玲香の好物といえば、新しく発見してきたカッコいい男子の話であったり、自分の恋の話であったり、自分以外の恋の話であったりする。

響子も始めは玲香に好きな人なんかいないと、つつぱねていたのだが、それで納得するような玲香ではなく。
ありとあらゆる機会に追求されるその状態に耐え切れなくなった響子は、ついに生贄を差し出すことにした。

つまり、特に強い恋心をいただいていたわけではなく、ただ普通に「カッコいいよね」と好感をもち、他の女子とともに観賞させていただいていた生徒会長をターゲットにしたのだった。

生徒会長をターゲットにしたのは、理由がある。

その最もたる理由が「絶対に成就しない」自信があったところである。

つまり、ありとあらゆる女子から狙われているような生徒会長を自分の恋の対象とすることで、接近（あのファンを押しつけて？）、観賞（その他大勢にまぎれてしまえば、めだたないよね）、告白（いやいや、絶対に無理でしょ。振られるだけだつて）などなど、女子高生の恋愛において求められるいろいろな行為を時には理由をつけて拒絶し、時にはゆるーく行い、玲香の「恋バナ」欲求を満たすいいターゲットとさせてもらったわけである。

もちろん王子様な彼を相手に、いろいろな夢を玲香と語るのは楽しかったし、きゃぴきゃぴ言いながらも現実生活に全く影響を与えることないその状態は響子にとって、とても心地のよいものだった。

それに恋というジャンルにおいて尽きることのないネタをもつ玲香と話す場合、90%ぐらは彼女の話聞いてればいいわけで、響子はその話を聞くだけで、自分の学生生活の恋愛部分を満たされているのを実感していた。

そんなターゲットを1年の夏ごろに早々と玲香に贈呈し、淡い恋心とも呼べないようなほよほよした感情を、玲香の望むラッピングで包んで提供し、3年の春まで過ごせた響子は、誰かにその「恋バナ」を聞かれるという状況を全く想定していなかった。

いや、別に聞かれてもいいかな、とは思っていた。思っていなければ、あんな教室などという無防備なところで、声を落としていたとしても話はしない。

どうせ誰かに聞かれても、生徒会長へ恋する女子など全く珍しくないわけで、まあ多少「野崎さんて思ったよりもミーハーだったんだね」ぐらいに思われる程度だろうとわかっていた。

その情報がたとえ学校で共有されようと、本人の耳に入ろうと、全く響子の学校生活に影響を及ぼすことはない、と、確信していたので

ある。

それなのに、なぜだろう。

生徒会長のこの反応は、響子の想像を超えた、全くの異常事態であった。

お付き合いにいたるまで3

響子が全く予想もしていない現状に衝撃を受けている間に、生徒会長は彼の心の内をととうと語る。

照れている割に、全く臆することのない感情の発露は、やはり自分を振るものなどいないという自信の表れなのか。まあ、彼は自分に対する響子の想いを昨日聞いているわけで、彼のような王子様じゃなくてもおのずと自信は持つのであろうが。

「響子さんてあんまり僕に話しかけてくれなかったじゃない？あ、玲香と一緒にいる時は違ったけどさ、あれは玲香がなんか響子さんに無理強いしているような雰囲気とかあった気がしたし。…今はもう照れてただけだってわかるけど。本気で僕気にしてたんだよね。玲香いないときは全く話しかけてくれないし。僕から声かけてもそっけないし…」。

まさか両想いだなんて思わなくて、本当に昨日寝れなかったよ。

あ、勝手に、響子さん、なんて呼んでるけどいいよね。彼氏彼女で苗字で呼び合うなんて、他人行儀すぎるし。僕のこと、櫨って呼んでね。特別な人から名前前で呼びかけられると嬉しいよね。どうでもいい人からの呼びかけは対して気にも留めないのにさ…」

響子の反応が無くても発展していく会話に、やっと彼女は気づき、ストップをかける。

「あ、あの、生徒会長…」

「櫨って呼んでっていったじゃん」

「あ…じゃ、じゃあ…か、櫨くん…あのね」

この事態を止めるには呼び方なんてたいしたことではない、と思いつつも彼のテンションに乗せられて、響子の頬を染め上がるのがわかる。なんだか本当に恋する乙女のような反応である。

「ああ、かわいいなあ。頬を染めて名前を呼ばれると、本当に照れちゃうね」

權が言わなくてもいいコメントをいれるので、響子の頬は赤くなるばかりである。

「あ、あの、だから……權くんて、そんなに饒舌だったっけ？」

始めに言おうとしていた内容を忘れて、響子は思わず聞いてしまった。

なぜなら、權はどちらかというと愛想はいいものの、そんなに女性に対してしゃべるようなタイプではなく、ファンの女性たちへの対応は丁寧だが必要最小限で、笑顔でごまかしてしまうような所がある。

響子は「いち權ファン」として求められる期待値に多少沿うように対応するために、消極的ではあったが観察の機会は逃さなかったのだ、今の權の対応は違和感を感じてしまう。

男同士でのやり取りは、快活であったが、こんなに軟派な感じでもない。

すると權は多少きまり悪げな表情と、先ほどの照れを混ぜ合わせて視線をそらしながら言った。

「いや、ちょっと舞い上がってるよね、僕。昨日からテンションが

異様に高くてさ、顔も緩みっぱなしだし…。イメージ崩れちゃうよね…。失望した？」

口元を手で覆っているのは、緩んだ口元を隠すためらしい。最後に眉間にしわを寄せて情けない表情を見せると、響子に視線を合わせて問いかけてきた。

なんか、今の質問は墓穴を掘ったような…。

嬉しさ全開の一連の動作に罪悪感が膨れ上がっていた響子は、自分で自分を壁際に追い詰めたのを感じた。

「い、いや…そんなことないよ…」

自分より数倍もスペックの高い彼に対して、駄目だしするような度胸は響子にはない。

正直なところ、2年間も続けてきた櫛フアの部分が、彼の今の表情に対して「いいモノ見た〜！」と喜んでいる状態である。

「ほ、本当に？…いや、僕も響子さんのどんな部分を見てもかわいって思える自信があるんだけど、男と女じゃ違うかなと、ちょっと心配で…いや、付き合ってからこのテンション治まるか、正直わからないんだよね。本当に失望してない？なんかスマートとか余裕とかいつも言われてるから、そのイメージを響子さんが好きだったらどうしようかと…。本当に？」

なんだか、みんなの憧れの王子様が、響子の評価をこれほどまでに気にしている現状が、彼女にとってはとても心苦しい限りである。失望もなにも、彼の人間性の細やかな部分まで思いいれを特に持っているわけでもない響子は、今の彼を見て思うことは「人って本当に多面性があるんだな」といった一般論の域を出ていない。

しかし、權は自分の問いかけに対する響子の返事を息を詰めて待っているようであるので、このままにも言わないわけにはいかないようである。

そこで、響子はとりあえず彼を傷つけないために、自分に出来ると思われる精一杯のことをした。

つまり、彼女のなかの「權ファン」を前面に押し出して、彼の心を守ったのである。

「うん、大丈夫。權くんはどんな權くんでもかつこいいよ。むしろ、いつもの余裕さが無くて、かわいいというか、身近に感じるというか…。權くんもやっぱり、私たちと同じ高校生だったんだね」

この響子の言葉は、ライトな「權ファン」として客観的な観察から出たフォローであつたのだが、身の程を知っていた常識人の部分が今このときが「告白の現場」であることを失念させていた為に、この言葉によって、ますます進退窮まる立場に追い込んでいったことを、後ほど冷静になってから反省することになるのである。

お付き合いにいたるまで4

…結局、あのまま櫛のテンションにひきずられる形で、お付き合いすることになったのだろうか。

響子は家に帰り、部屋のベットに寝転がりながら、今日の出来事を反芻する。

「お付き合いしよう」に「はい」とは答えてないよね？

でも、彼の両想いの認識は、結局訂正できなかったし…。

いや、軽い気持ちとはいえ、ちよつとは彼に対して恋心めいた部分があるのは確かなのかな？

見てるだけで嬉しい気持ちになるし、かつこいい表情などみると、ドキつとすることもある。

でもやっぱり、なんか、こう、現実味のある感情ではないんだよねあ。

響子にとって、恋とはいまだ謎の感情である。

玲香のいろいろな恋バナを聞いて、ますますわからなくなっている。なぜなら彼女は玲香のような強い情熱にとらわれることもなかったし、好意と恋の区別が自分でつくのか、全く自信がない。

さすがに高校3年生にもなって、恋も実感できないような女はどうなのかと思うが、いろいろな人にリサーチしても、彼女のなかで確信めいたものが得られることはなかった。

友達いわく、恋って

「見てるだけで心があつたかくなつて満たされるの」…うん、櫛く

ん見たときの幸せに似てる。でも子犬とか子猫とか見てても同じ感じよね？

「手とか偶然触れちゃったりすると、ドキつとするのよね」…あんまり男に免疫のない私には、クラスメートの男子でもドキつとしますが…。

「なんか意味もなく彼に触れなくなったり」…うーん、確かにきれいな筋肉とか触りたいけど。男子の筋肉ステキよね。…弟の腹筋でも感じたな、それ。（そして触らせてもらった、もちろんドキドキなんてしなかったけど）

「キスとか好きじゃないとできない？」…今現在誰ともキスしたい衝動はないなあ。なんか自分以外の人の唾液とかって気持ち悪くない？たとえそれが家族でも小さな子供でも、駄目かもしれない。

いやいや、本当に皆さん、すごいわあ。

響子は素直に関心してしまう。

自分が果たして「恋」という感情を確信をもって実感することができる日があるのかどうか、正直いつて不安なのだ。

懼くんへの感情も正直、ミ―ハーな域を出ていない気がする。

彼をかつこいと思うのも、ただの客観的な事実なだけで、正直100人いたら100人が彼をかつこいと思えるだろうし。

そのかつこよさが特別自分にアピールしているのか、というのもよくわからない。

彼がある意味普通の容姿をしている男子であつたなら、特別に「かつこい」と思ったことが「恋」なのかな、と思えるのだが。

その点、彼の感情は確かなようである。

勘違いやうわべ部分のイメージだけを見ていたとしても、間違っても特別かわいいわけでもない自分のことを、「かわいい」と言っ
て頬を染めることができるのである。

たぶん同じ教室にいてさえ、ぱっと名前が出てこない男子のほうが多いようなそのた大勢の自分を、あんなにも「特別」な部分の多い彼がよく好きになんてなれたものだ。

…あれ？

私、もしかして「その他大勢」じゃなくなるんじゃ…？

今まで權の彼女として噂されてきた女性たちは皆美人だったり、かわいかったり、なにか「特別」なものを持っている人たちばかりだった。

噂は信憑性の高いものから低いものまでたくさんあったので、響子の耳に入ってきた人たち全員と恋人関係にあったわけではないだろうが、それでも皆ある意味「納得」できるような人だった。

なにせ、あまり生徒の名前など知らない響子でも思い当たる人ばかりである。

冗談じゃなかったとしても、私「身の程知らず」の称号をいただいでしまうのでは…？

今までは權の気持ちに対して、自分のあまりに不釣り合いな不確かさに気持ちが集中していたが、この現状が他の人からどう見えるのか、思い当たった瞬間、響子の顔から血の気が引いた。

お付き合いにいたるまで5

權くんの言う「お付き合い」とは、どのような行為をさすのだろうか。

それはどうにかして、他の人に隠し通すことができるのだろうか。

響子は現状を考える。

「お付き合い」に返事した覚えはないけれど、あのテンションの權くんだったら、おそらく承諾したようになっていく気がする。

その認識を覆すような身の程知らずの「お断り」をするような度胸は響子にはない。

それならば、彼のテンションが下がり、響子に「失望」するか、他の誰かに恋するまで、なるべくおとない「お付き合い」をしていくほうが簡単な気がする。

ただし、それは誰にも気づかれないという前提のもとでだ。

あの絢爛豪華な過去の「彼女」たちのリストに自分の名前が加わるかと思うと、響子の胃はズーンと重くなる。レベルが違いすぎて、自分の名前が悪目立ちすること間違いなしだ。

一度リストに加わってしまえば、おそらくは卒業するまでその件で噂されることは逃れられない。

もちろん噂とは風化するものであるが、どれくらいの期間で風化するかわからないし、一度埋まった地雷がいつ再び爆発するのかとびくびくしながら学校生活を送るのも、あまり好ましくない。

「お付き合い」の状態について、權と話あう必要があることは明らかだった。

明日、朝一番で話そう。

櫛の携帯番号やメールアドレスなど、もちろん知らない。

問題は、櫛の呼び出し方だが、玲香に頼めば問題ないだろう。

日常的に生徒会のことと呼び出したりし合っている玲香ならば、全く目立たないし、その玲香に金魚のフンよろしくくつついている響子も普段と別段変わらない風景だろう。

そうすると、玲香には今日のうちに根回ししておいたほうがいい。

明日教室で話そうものならば、恐ろしいテンションで皆の注目を集めてしまいたいそう。

もちろん玲香は響子のいわゆる「片思い」が成就したことを、喜んでくれるのだろうが、その喜び方を思うと響子の背中に再びいやな汗が浮かぶ。

だが、どう話を通したらいいのか。

玲香に今日の件を話した時点で、櫛くんを人前で呼び出す権利を響子が獲得したとみなすだろうし、人前でいちゃいちゃすることは嫌いな玲香だが、恋人同士である事実を隠すのは嫌いな彼女の主義は響子がよく理解するところである。

そもそもそんな「彼女の権利」などいらない響子の心情を話すには、玲香と今まで行ってきた「恋バナ」を否定しなければならぬ。

それは玲香との友情を壊すことになりかねない。そんなのはいやだ。

「恥ずかしい」などと理由をつければ、玲香は堂々と櫛くんの教室で「あんたの彼女が話しあるって」などと大声を上げかねないし（というか、他の友達のとくに、それをやったのを知っている）、手紙を託すなどということは、手紙という物証が残る時点で候補から消える。

やはり、權とお付き合いすることになったことを打ち明けた後、その事実を公表するのをタイミングを計りたいなどと理由をつけて口止めし、メールアドレスと電話番号を舞い上がってお互いに交換するのを忘れた、とでも言えば問題ないだろうか。
まあ、交換するのを忘れたという事実は確かだろうから、問題ないだろう。

電話番号ゲットしたら、この件について、權さんと話し合いを行うのがベストだろう。

学校で玲香に呼び出してもらった危険を冒すよりも安全な気がする。うん、これ以上權さんのテンションの暴走も怖い気がするし、ちょっとテンションを下げる方向でなんとか話せないだろうか。
あの嬉しさ全開の照れた表情を見なければ大丈夫な気がする。

それでも、なんだか勇気がでなくて、玲香への連絡を夕飯後にしようとして、響子はリビングへ行くことにした。

ご飯を食べながら作戦の詳細を考えるのが一番だ。

…その選択を2時間後に激しく後悔することになるのだが。

お付き合いにいたるまで6

響子が電話を玲香にする前に、携帯が震えた。

携帯に表示されるのは、見覚えのない携帯の番号。

響子の携帯は基本的に家族と玲香以外から電話がくることはない。

たまに、うっかり景品につられて書いてしまったアンケートや、図書館の書籍予約などでかかってくることもあるが、そういった番号は一度かかってきたら、わかるような表示で携帯に登録してしまう。なぜならば、見覚えの無い番号や非通知の電話は、響子の最も苦手とするもののひとつであるからだ。

一度出てしまえばどうってことないのだが、なんの電話かと思い通話ボタンを押す際に胃が引き攣れるような嫌な気分で体が満たされてしまう。

ちなみに、知っている人物からの通話なら大丈夫かというと、そこらもどちらかというと苦手である。調子の悪いときには「なったの気づかなかったわあ〜」という理由で、心のなかで土下座しつつも見なかったことにしてしまうことがある。

そんなこともあり、基本的に見覚えのない番号は一回目は出ない。続けざまにかかってくるたび、その後間を開けてかかってくるような場合は、出る。そうすれば、あまり意味のない勧誘の電話に出してしまうことが少ない。というか、そういう電話はとにかく何回もかかってくるので、その呼び出しが続く間の嫌な気持ちと秤にかけると覚悟を決めて出てしまったほうがいいことが多い。

勧誘の電話は、それを仕事としている人だったり、仕事にもかかわらず感じよくフレンドリーな通話をしなければいけなかったり、そういった事情まで深読みしてしまうと、なかなか無碍にはできないのだ。まあ、最終的には断り、あまりにしつこいと、最初の気持ち

を忘れてブチっと通話を終了してしまうのだが。

とにかく、久しぶりにかかってきた、正体不明さんからの通話は、響子の気分を沈ませながらも、つながることはなく、切れのだった。それから30分後。玲香からの着信を見て、響子はあわてて携帯をつかみ、自分の部屋へ駆け込む。友達との会話は家族の前では恥ずかしくてできない。ドアを閉めながら通話ボタンを押すと、異様にテンションの高い玲香の声が耳元に響いてきた。

「ちょっと、響子！やったじゃない！愛しのダーリンゲット」

……今出来ることをすぐにやらない場合、自分ではどうにも出来なくなる可能性があります。

「えっと…?」

「權から電話もらってさー。いやーびっくり。あいつ全くそんなそぶりみせなかったのに、実は響子のことが好きだったとかって言うじゃない?」

「あ、そ、そうなの…?」

「知ってたらすぐに縁結びしてあげたのにねえ」

「あ、…いや、別に」

別にそんなことを響子は望んでいなかったのだが、玲香との恋バナの歴史がそれを堂々と言えるような権利を剥奪している。今更響子

のテンションなんて説明できませんって。

「響子からも恥ずかしいから絶対に權に悟られるようなことするな
って、えらい口止めされてたから、全然そうだった話できなかった
のはイタかったわ」。どんだけ時間無駄にしてるのよねえ、あんた
たち」

「……まあ、生徒会長には彼女いたからいいんじゃない？」

響子は、その事実で玲香の熱を冷ませないかと、冷静な声で告げる。
ここで「嫉妬」しているなどと受け取られては目もあてられない結
果になるのがわかってるので、あくまでも軽やかに、冷静に。

「あ、それなんだけどね。違ったみたいよ？」

「え？なにが？」

「いや、なんかうちらコアメンバーのなかでは、權がそういう彼女
ネタとか話振られるの大嫌いなもの知ってたからさ、信憑性の高い
相手を擬似彼女として影で話してたんだけど。」

「擬似……？」

「あれ？言ってなかったっけ？」

「いや、その単語初耳」

「あ、そっかー。結構初期の段階で「擬似」って単語省略して話し
ちゃってたから、忘れてたわ」

「……は？」

「あ、ごめん、ごめん。それでね、さっき電話で聞いて判明したん
だけど、響子が”初”彼女だった」

……え？

今の情報を理解する危険性を本能的に察知したらしい響子の脳が、
活動を停止する。

しかし、そんな状態が電話回線を通じて玲香に伝わるわけもなく、
続々と知らない情報を響子に伝えてくれる。

「私もさー、びびって問い詰めたわけ。そんなわけないじゃんって思うじゃない？そしたらさ、なんかどうしても断りきれないお誘いは、しかたなく付き合うことがあったらしいんだけど、別に彼氏彼女ってわけじゃなくて、ひたすら義理や義務だったらしいわ。まあ、男女二人で出かけたなら他からみたら立派なデートだしねえ。噂って真実を含むと本当に最強だねー」

玲香はあははと能天気にかう。

「断りきれないお誘いって、なんじゃそりゃ？って思ったら、なんか告白やら交際やら、男女としてのお付き合いを前面に出されるアプローチはしっかりと断りできるんだけど、友情やら權の責任感やらそういった部分に上手くからめてのお誘いは断りづらいんだってさ。ほら、權って優等生チックな感じだし。生徒会長とやらも辛いよねえ。まあ權も馬鹿じゃないから、一度そういった部分を利用されたら、次回はずいぶん用心して回避してたらしいけど。どおりでコロコロ噂の彼女が変わるはずだわ。二回目はなかったってことよねえ」

響子は玲香の話を聞きながら、自分が唯一救いにしてたらしい事実がどうやら全くの事実無根だったらしいことを認識した。やばい。やばすぎる。

玲香の話が本当ならば、先ほどの響子の懸念など、全く持っておかしいほど事態は深刻である。あの絢爛豪華な”擬似彼女”の列に響子は並ぶわけではなく、その上の今まで空席だった本物の彼女、という座に納まることになるらしい。

Aランクの女性たちを差し置いてBランクの響子が、權の彼女というSランクの席に着く。

どうみてもおかしい。

人は常識の範囲を超えた行動に対して、かなり残酷になることを響子は知っている。

響子だって全く興味のない相手に対して、面白半分にいるんな噂を楽しんできた。もちろん本人に対して全く含むところが無いので、相手には伝わらないという前提で、である。

一般論にはめて語るそれらは、事実を多分に含むためにかなり辛らつなものとなる。

これから影で語られるであろう会話を、かなりリアルに想像できてしまう響子のテンションは底まで落ちた。

「…あんまりに嬉しそうだったから、問題ないかと思って。まあ、面と向かって話せないことはやっぱり携帯に限るよねえ。激甘メルとか見せてね。楽しみだなあ。」

響子の想像中に続いていたらしい玲香の会話は、聞き逃せない単語で響子の意識を引き戻す。

「…携帯？メール？」

「うん、教えておいたから。なんかすぐに電話したらしいけど、出ないって言ってまたこっちに掛かってきたんだけどね。そのあわてぶりが面白くてちょっとからかつちゃったわ。いや、今日はイイもいろいろ見せてもらったり、経験させてもらったり、響子さまさまってやつよね。まあ、響子の携帯はあんまり”ケイタイ”じゃなくて置き電話並だってフォローしといたから大丈夫だと思うけど」

「フォローって…」

「あ、そうそう、この電話の目的忘れてたわ。090-xxxx-xxxx12が權からの着信だから、ちゃんと出るのよ！緊張してあんまり話できなかったって落ち込んでたから！」

「さっきの電話は生徒会長からだったのか…。っていうか電話番号教えたのね」

「なによ、付き合いだしたら教えるの当たり前じゃない。響子は私が教えるっていても本人から聞かないと意味がないって登録しなかったらわかんなかったのよ」

「いや、だつてろくに話したことの無い相手が、自分の携帯番号し
つてるつて、怖くない？教えてもらつても使う機会ないし」

「ろくにつて、一応あんたも生徒会のメンバーなんだから、ちょこ
ちよこ話してたでしようが」

「挨拶と業務連絡でしょ。コアメンバーでもないし、用事あるとき
以外は特によりつかなかったから、生徒会長の記憶に残つてること
自体が私の驚きだったわ」

玲香のあきれたようなため息が聞こえる。

「あ、まあ、玲香の友達つて部分で認識されてても不思議じゃない
か…」

「あんた、どれだけ自分の存在感否定してんのよ」

「いや、中学時代から、そんなもんじゃない？なんていうの、クラ
スメートCみたいな」

「…Aですらないわけね」

「まあ、高校に入つて玲香みたいな友達が出来たことすら、私にと
つてはかなりの驚きだったからねえ」

地味な仲間とともに、男つ気も華もないながらに、充実した3年間
だった中学生生活を思う。

穏やかでなにも縛られない日々はとても楽しかったといえる。ま
あ、嫌な思い出が無いわけではないが、響子の人生に多大な影響を
与えるようなイベントが発生しなかったとはいえるだろう。

「なにそれ、人を珍獣みたいに言わないでよ」

「いや、珍獣というか、私には出来すぎた友達というか…なんかこ
う、階級の差を越えてお嬢様に仲良くしてもらう使用人、みたいな
？」

「はああああ？」

「あ、いや、別に卑下してるわけでもないんだけど、玲香みたいな
人気者がまさか私の友達になるなんて、思つてもみなかったわけよ。
本当に感謝してるんだよ？」

「……その認識自体が卑下そのものだと思うけど、まあ、響子のネガティブ思考は今に始まったわけじゃないから、スルーしとく」

「うんうん、感謝感謝」

「…で、話変わるけど、なんで今更”生徒会長”なわけ？」

「へ？」

「いや、權のこと。私ですら呼び捨てなのに、彼女であるあんたが”生徒会長”って思いっきり違和感なんですけど」

「あゝ、それね。うん、まあ名前で呼べとは言われたんだけど、やっぱり言い馴れないというか、玲香とはずっと”生徒会長”って呼んでたし、なんかねえ」

「ま、うちの会話ないだけであればいいけど。もうちょっと彼女らしくしようよ」

「そうね、まあ実感が沸いてきたら、そのうち…」

「実感ないわけ？」

「ないでしょ、そりゃ。今だって脳内妄想かと思ってるぐらい。夢オチとか、いや、始め本当にたちの悪い冗談かと思ったんだよね、男子内で賭けでもしてるのか、とか。罰ゲームか、とか」

「…まあ、そういう可能性はなさそうよ？」

「…うん、話してて気づいたわ、さすがに」

「まあ、というわけだから、權と話でもして、少しでも実感しなさいよ。電話後でまた掛けるって言ってたし」

「え？」

「だから、電話また掛けるって…」

「玲香、うちらもう1時間以上話してるけど…？」

「うん、大丈夫。權もさっきの擬似彼女でさすがにまずいと思ったらしくってさ」

「はい？」

「コアメンバーにだけでも訂正と事情を説明するって」

……響子は自分の読解力を疑う。

ソレツテ、ドウイウコト？

「訂正と事情・・・？」

「うん、初彼女だつてことじゃない？」

「まさか？ありえないでしょ？」

「・・・？なんで？すごく嬉しそうだったよ。なんか校内放送したいぐらいだつて」

「は？」

「いや、早く彼女が出来たつてことを知ってほしいみたい。なんか随分片思い？つていうかあんた達両想いだつたのにねえ。その片思い期間が長かったから、やっと彼女だつて言えるのが嬉しいみたいねえ。さっき言つた勘違いされるようなお誘いもやつと堂々と断れるつて喜んでたし」

「断るつて・・・」

「いや、さすがに彼女いるから悪いつて言つたらカドたたないですよ。そこまで言つてもひっこまないようなずうずうしい女はさすがに下心見えるだろうから、さらに断りやすくなるだろうし」

「はあ、便利だねえ」

「いや、あんたのためでもあるでしょ？うん、愛されてるねえ」

「・・・つて、いや、さすがに校内放送は・・・」

「だよねえ。まあ、大丈夫。コアメンバーつて言つてたし」

「コアメンバー・・・つて誰いたつけ？」

「ん？渉外の里中と企画の藤本、経理の友野に広報の桜田かな？」

「桜田さんつて・・・」

「あ、そっかー。裏校内放送だ。權、頭いいー！」

生徒会執行部コアメンバー、桜田千尋は広報の天賦の才をもつ。

すなわち、彼女の手にかかれれば、情報操作など当たり前。周知させたい情報を流し、隠したい情報を消す。

様々な行事に欠かせない情報の伝達基点として、その人脈は幅広い。

響子のかすかな希望が失われた瞬間であった。

お付き合いにいたるまで7

翌朝、ベットで目が覚めたときから、響子のテンションは低かった。理由はわかつている。

あの電話の後、響子はどうとう現実に対して向き合う努力を放棄した。

つまり、携帯の電源を落とし、早々に眠りについたのである。

寝付けないかと心配したが、日ごろの平穏無事な毎日に慣れきっていた脳は予想以上のダメージを受けていたらしく、すぐに眠りが訪れた。

ただし、安らかな眠りだったとは言いがたく、疲労感のひどい目覚めである。

うつすらと覚えているのは、昨日の不安が形を成した夢だったのだろうということ。

ただ具体的なイメージではなかったため、きっと夢ですら今後の展開についての想像を放棄したのだろうと、自分の情けなさを再確認する。

いつまでも電源を落としたままではさすがにマズイだろうと、携帯電話の電源を恐る恐る入れてみれば、やはり玲香から言われた番号がああ後3回ほど着信履歴に残っていた。

あの電話会社のメッセージを耳にしたときの懼の気持ちを見ると、罪悪感がものすごい勢いで全身を支配する。

メールも受信したので、これまた恐る恐る開いてみたが、拍子抜けしたことに、いつものバルクメールであった。

響子はひとまず安堵のため息をもらし、体にまとわりつく罪悪感をなだめながら、朝の支度を開始した。

先延ばしにした事实は、響子になんの安らぎも与えなかった。

むしろ、昨日の電源オフ状態についての話題になんと言い訳をするか、次に權に顔を合わせた時にどう振舞えばいいのか、関係ない第三者からのちよっかいにはどういった態度で臨むのか。

頭のなかは、昨日からの問題で沸騰寸前である。

こころなしか頭痛までしてきたようで、ますます学校に行くのが嫌になってくる。

それでも学校をずる休みするような器用さは持ち合わせていないし、權とのことを先延ばしにしてきた後ろめたさもあって、響子は重い足取りながらも登校することにした。

タイムリミットも迫ってきたなかで、決心したのは以下のとおり。

昨日の携帯は、玲香と話をした後、すっかり寝てしまい、ただでさえ少なかった充電がその間に切れた（なんてタイミングのいい話）。權との顔あわせは、とりあえず普段どおり。昨日の対応でやつぱり好きじゃなかったかも、という展開だって十分ありうる（というか、響子だったら十分恋も冷めるような対応だった気がする）。

第三者からのちよっかいはあるかどうかかわらないけど、やつぱり不意打ちは困るので、とぼけるか用事があると言って振り切ってしまう（足は平均よりかなり遅いのだけど、振り切れるかなあ）。

家から駅までに、いつもより5分も余分にかかった事実が、重い足取りを証明していた。

そこで、制服のポケットにいれていた携帯が震えるのがわかる。

震え方は、電話の着信。

とたんに激しい拍子を刻む心臓と、歩みを止めそうな足に叱咤して、歩きながら携帯を確認した。

発信者は櫛だった。

あと少し早く歩いていれば、電車内だという言い訳が自分にできたのに、と最後まで悪あがきをする心の声を押さえ込み、通話ボタンを押す。

響子は、定期をとりだして改札をとりぬけながら、「はい」と答えた。

「響子さん？」

「はい」

「あ、櫛です。よかった、昨日なにかあった？」

響子の想像どおりの問いに、直接顔をみながら嘘をつかなくてよかったと、ずるい安心感を感じながら答える。

「あ、玲香と話した後で寝ちゃったみたいで……。ごめんなさい、電話してくれたんだよね？」

「ああ、そうなんだ。それだったらいいんだけど、なんか電話が迷惑だったかな、とちよつと不安になっちゃって。ごめんね」

本当にほつとしたような櫛の声と、ずばり凶星な不安内容に、響子は罪悪感をますますつのらせ、つい言わなくてもいいことまで言うてしまう。

「いや、別に迷惑とかじゃないから。うん、ごめんね本当に。玲香とかの電話もよく着信気づかなかつたりして、怒られるの。よくないよね」

「あ、いや迷惑じゃなかったらいいんだ。また電話していいよね？」
「うん、もちろん。また出れないこととかあるかもしれないけど、全然気にしないでバンバン掛けて」

罪悪感とはかくもここまで人を饒舌にさせるものなのか。

普段なら絶対に言わない言葉である。

というか、冷静な普段の響子であったなら「あまり電話って好きじ

やないから、掛けられても困るかも」と言っていたところである。

「ああ、よかった。朝からごめんね。今日って何時の電車で来るのか知りたくって」

「え？」

「いや、響子さんは下り電車でしょ？今日は何時の電車になりそう？8時5分着？16分着？」

「あ、えっと、5分間に合うかな・・・？」

思わず駅のホームに表示された次発の電車を見て、到着時間を計算する。

あまりに突然過ぎて、その質問の意図がわからない。

ただ、答えた後でなにやら嫌な予感を感じてしまう。

「そっか。了解。じゃあ後でね」

「あ、うん」

響子はそのまま切れた携帯をしばし眺めていたが、電車が到着したところで、乗り込んだ。

ぼーっと電車に乗っていると、先ほどのやりとりの意味について、頭がめまぐるしく回転していく。

学校の最寄駅まで5駅。時間にして15分ほどである。

いつもなら本を読んだり、参考書を読んだりしているのだが、今日はそんな気分ではない。

先ほど感じた嫌な予感は、無視できないほどに時間とともに膨らんでいく。

後で、っていつのことだろう。

教室に来るってことだろうか。それはちょっと注目がすごそうだ。

でも電車の時間、そこまで詳しく知りたいかな・・・いや、まさか駅で待ってるってことないよね。

權くんは確か、自転車通学だったはず。

駅は坂の上にあるから、自転車でわざわざ上るのは、めんどくさそうだ。

いや、なにより、学校の最寄駅ということは、電車通学の生徒がすべてその駅から降りてくるというわけで。

まさかそんな、目立つところで王子様が待っているなんてことになったら・・・。

朝感じていた頭痛が、どんどん主張を強くする。

いや、まさかね。

權は確かに学校内で絶大な人気を誇る完全無欠の王子様であるが、彼自身の行動を見ていると、別に彼がそのことを楽しんでいるわけでも、その事態を助長しているわけでもないとわかる。

彼ほどのキャラクターを持っているとあまり意味のない行動ではあるが、なるべく周囲を刺激せず、事を多きくせず、それどころかむしろなるべく目立たないように行動しようとしていることに、響子は気づいていた。

なぜならば、それは響子がとても共感できる行動だったから。

響子のキャラクターだったら、完全に成功していたであろうその行動が、全く結果を伴っていないのを見るのはとてもかわいそうだと同情すらしていたから。

うん、彼は自分の行動がどんな事態を引きこすか、ちゃんとわかっているはずで。

まあ、教室に来るぐらいなら、玲香に側にいてもらえば、なんとかなるかな。

嫌な予感と頭痛を抱えつつも、響子は自分に言い聞かせていた。

お付き合いにいたるまで8

着いた先はやはり生徒会室だった。

扉を開けた里中に続いて室内に入ると、響子の想像通り櫂が一人で待っていた。

「じゃあ」

「ああ、ありがとう」

里中は櫂に挨拶をすると、そのまま生徒会室を出た。

出る際に扉のところで立ち止まっていた響子は慌てて道を譲る。

余裕のない表情の響子を見て、可笑しそうに「またね」と出ていった。

扉が閉まって、改めて櫂の方へ顔を向けると、窓際にいた彼が響子の側まで移動していて、ドキッとした拍子に肩が大きく跳ねてしまった。

「あ、ごめんね。急に呼び出したりして。教室から来てもらうよりも目立たないかと思って」

につこり笑う櫂の笑顔は極上で、2年間で費やした”櫂ウォッチャー”の響子としては、こんな間近で見たらさらに鼓動が速くなってしまう。

間近で見る王子様の迫力ですごすぎるわ…。

冷静だったはずの響子の脳が熱を帯び出す。

やばい、落ち着け、と繰り返し響子の脳をクールダウンさせてくれたのは、以外にも櫂であった。

「昨日はごめんね、テンション高すぎてちょっと引いちゃったですよ。あの後すごく反省したんだよね。響子さんの顔、ちょっと強張ってたし」

眉尻を下げてすまなそうにほほ笑む櫂の顔は、それはそれで素敵なのだが、その表情を見た瞬間、響子の脳を駆け巡っていた血が落ち着き、一瞬にして冷静になった。

なぜならそれは、櫂がファンに見せるいつもの仮面の表情で、響子にも十分見覚えのあるものだったからだ。

「うっん、大丈夫。気を使ってくれてありがとう。正直、助かったよ」

この櫂であれば、響子は十分対応できる。

いつも通りの知り合いのテンション。相手が櫂ということで、ちょっと綺麗な顔にドキドキはするけど、別にお互いに特別な気持ちの交流があるわけではない、他のクラスメートと交わすような、ありきたりな日常の場面。

それは響子に安堵をもたらしたが、心のどこかがヒヤリとした。小さな、小さな氷の粒。

それを自覚しながらも、響子は無視して目の前の櫂に意識を向ける。櫂の表情が一瞬揺らいだ気がしたが、本当に一瞬のことだったので、響子の見間違いかも知らない。

「よかった。時間がないから、単刀直入にいつちやうけど、生徒会の臨時コアメンバーとして、響子さんに入ってもらいたいんだ」

「え？」

プライベートな話かと思いきや張っていた響子は、自分の体から空気の抜ける”プシュー”という音が聞こえてきそうな気がした。ただの業務連絡なら、意味深に中里が出ていかなくてもよさそうなものである。

「これから球技大会と文化祭で忙しくなるんで、規約内にある臨時コアメンバーの追加事項を使いたいんだけど、先に響子さんの了解が欲しかったんだ。ぜひ力を貸してほしいんだけど、駄目かな？」

「えっと、どれくらい忙しくなるのかな・・・？」

響子は高校3年になってバイトを辞めている。しかし、それは受験勉強をするためで、はなから推薦入試は検討していないので、あまり時間を取られるのは好ましくない。

いつも学校のために時間を割いているコアメンバーには悪いと思うが、響子にとっては高校生活よりも将来を決める大きな要因である大学受験のほうが大事である。

「週3日ぐらいかな。玲香からバイトしてないって聞いたんだけど」「うーん、…受験勉強しようと思ってたんだよね」

あまり乗り気でないのを感じたのか、櫂の表情が曇る。あまり断られることを考えてなかったようである。

「あ、でも1時間から2時間で進行状況確認したら、あとは仕事割り振ったメンバーが実際動いてくれたりするから、その後はみんな結構好きなことしてるし。帰る人もいるから…」

「1時間から2時間かあ。じゃあ4時から5時ぐらいには学校出れるよね？」

「あ、うん。もちろん行事前はそうとも言えなくなるけど。なんか用事ある？」

「あ、いや、早い日なんかは図書館行ったりしてたから、あまり遅くなると寄れなくなるなあって…」

頑張っている人を前にして、やはり歯切れの悪い言い訳めいたことを続けていると、だんだん罪悪感がわきあがってきた。櫂のがっかりしたような表情も追い打ちをかける。

なぜだか失望されたくない、という思いが強く湧いてきて、気付いた時には言っていた。

「あ、でも週3回ぐらいなら…大丈夫かも」

とたんに櫂の表情がぱあつと明るくなり、響子はもう前言を撤回できないことを知った。

「ありがとう。じゃあ、もう時間だから、これで。放課後ここに来てくれる？」

「うん、分かった・・・」

「じゃあ、一緒に出たらまずいだろうから、先に行つてね。僕は後5分ぐらいしたら戸締りして出るから」

櫂に送りだされた響子は、やっぱり業務連絡だったなあと、昨日のテンションとの違いに、ほっとするやら、ちよつとがっかりするやら、複雑な気持ちで教室に向かった。

教室に戻ると、もうそんなに時間がなかったので、玲香に挨拶をしたが、なにか聞いたそうな玲香を「放課後に」となだめて席に着く。内容が内容だけに、響子の性格を知っている玲香はこういう時は無理強いしない。放課後に追及されるのは免れないであろうが。

特に連絡事項などないホームルームをぼんやりと終えて授業が始まると、響子の思考は昨日からのことへと向かつていった。

なんだか、疲れたな…。

響子の正直な気持ちである。もともと櫂と両思いだったという事実にも、ほのかな嬉しさはあっても、圧倒的に驚きと不安、そして自分の手に負えない事態になっている焦りが大きい。

ついでに、櫂の態度や言葉にいちいち上がり下がりする自分のテンションも疲労感を増大させる。こんなに気持ちが動くことは、響子の日常において感動物の漫画や小説を読んだ時ぐらいである。

響子は話に引き込まれてしまったちなので、読んでは登場人物に感情移入して、泣いたり、笑ったり忙しいのだが、やはりそれは創られた話の中の疑似体験にすぎない。

本当に…リアル体験って勘弁してくださいって感じ。
なんか…もうどうでもよくなってきたな。いちいち感情が振り回されるのも、メンドクサイ。

自分の感情があまりに酷いことを自覚している響子は、心の中にも関わらず、小声で呟く。このまま真剣に今の状況について熟考すると、人づきあい全てが嫌になりそうな自分の性格をよく分かっている響子は、もうなにも考えずに状況に流されることを、決めた。

状況に流されることにして、考えることを止めた響子の気はとたんに楽になる。

放課後まで待てなかったらしい玲香と、人気のない教室を選んで二人でお弁当を食べる間、玲香の恋バナにもいつものノリで対応できる。

「いや、なんか普通だったよね。エリーの連絡網発動しなかったのかなあ」

「みたいだねえ」

「なんか、もつとこうドラマチックなイベントがあるかと思って楽しみにしてきたのになあ」

「うーん、でも生徒会長もそこは考えてくれたみたいよ？」

「へ？」

「うん？」

「あ、昨日あの後、櫛と話したの？何話した？知りたい！」

玲香が目キラキラさせて身を乗り出してくる。

墓穴を掘りました。

「えっと、結局電話はしてないんだけど、今朝生徒会室でね」

「うあ、密室……」

「いや、別にただの業務連絡だったけど？」

「は？」

「なんか、臨時のコアメンバーになって欲しいって。昨日の連絡、それだったんじゃないの？聞いてない？」

「聞いてないわ。なにそれ」

「え？玲香聞いてないの？……あれ？」

「何をするって？」

「いや、そこまで詳しい話してない。朝だったから時間なかったし。とりあえず放課後、生徒会室行くから、一緒に行こうよ」

「……ま、いつか。そんなことより、初デートいつよ？」

「は？」

「そういう話してないの？」

「うん、全く。……っていうか、昨日も私、返事してないし」

「え？」

「いや、なんか今朝の生徒会長のテンションみてたら、なんか“付き合う”の意味違ってるのかも？って」

「え、だって、その後の言葉からしたら、それ以外の意味なくない？」

「うーん、そうかなあ。……“お互いに好きでよかったね、そうだね”お終い、とか？」

「……小学生じゃないんだからさあ。っていうか今日の小学生ですらデートとかするよ？」

「うそ……。小学生でって、登下校じゃなくて、休みの日にわざわざつてこと？」

「するって。うちの時代と違うんだよ」

「……そっか。……しなくちゃ駄目なのかな？誘われたら、断つちやいけないのかな？」

「……あんた……」

玲香が絶句する。響子のテンションがあまり高くないことに、よう

やく気付いたようだ。

「うーん、私スケジュールが埋まってる状態って嫌いなんだよね。適度に空白に日がないとなあ。ていうか、これから週3日も会ったったら、デートする必要ないんじゃない？」

玲香は信じられないものを見るような目で響子を見る。

「いや、だって天下の生徒会長と並んで歩けるような服とか持っていないよ。恐れ多い。バーゲンでしか服を買えない女よ、ワタクシ」他の観点から言い訳を試みる。

なんとか理解してもらえないものか・・・。

まあ、玲香のお付き合いの話はそれこそ沢山聞してるし、難しいかもしれない。でもお付き合いの仕方って人それぞれだと思うし、玲香のようなドラマなデートなんて響子にはできない自信がある。

なんだか話せば話すほど墓穴を掘りそうな予感がした響子は、玲香に「でもほら、まだ一日しかたってないし、どうなるか様子みてみようよ、ね？」と誤魔化して、昼休みを切り上げたのだった。

お付き合いにいたるまで9

放課後、響子が玲香と共に生徒会室に到着すると、他のメンバーは既にそろっていた。

「お待たせ、ホームルーム長引いちゃって」

玲香が元気よく挨拶をすると、櫛が立ち上がって迎えた。

「全員メンバーが揃ったね。議題に入る前に、今日からコアメンバーとして仕事をしてもらうことになった野崎響子さん、臨時メンバーだからみんな知ってるよね？これから受験生として忙しくなる中で、2年の二人に負担がかかりすぎるのは本意じゃないから、とりあえず3年としてできることをやりたいので、玲香の友達ということで野崎さんに加わってもらうことにしました。皆には昨日連絡したよね」

話を聞いていると、どうやら玲香以外にはこのストーリーが回っていたようだ。玲香が響子をコアメンバーとして引張ってきたような話なのに、玲香に話を通しておかなくて良かったんだろうか。響子はぼんやりとそんなことを思いながら、頭を軽く下げるだけの挨拶をした。すでに面識はあるので、それで問題はないだろう。

玲香は櫛の説明で特に文句は無かったようで、ニヤニヤと響子に笑いかけながら、空いている櫛の隣の席へと行く。

他のメンバーも特に大きなリアクションもなく、響子に会釈を返すと早々に議題がスタートした。

「以上の点をそれぞれ担当が確認して次回の会合までに報告すること。・・・次回は定例だと明日だけど、不都合な人いる？」

櫛が周りを見回す。特に誰も異議を唱えないことを確認して、閉会

となった。

櫛はメンバーが帰り支度をする中で、里中となにやら話しこんでいる。

響子はほつと安堵の息を漏らすと、すばやく鞆に筆記用具と手帳をしまい、生徒会室を出て行くメンバーの波に加わった。

「玲香、この後どこか寄る？」

最後尾の玲香にそう声をかけて隣に並ぶと、メンバー全員が「は？」といった顔で響子を見た。

その反応を見て響子は心の中で、やっぱり駄目だったか、と観念した。

この反応はやはり、と響子は状況を把握する。櫛は事情を話して、コアメンバーのフォローを約束させたのだろう。

響子の為に、あの小芝居を打ったらしい。

朝の里中の様子で、彼には事情を話してあるだろうと思ったのだが、先ほどの紹介でどこまで櫛がメンバーを抱きこんでいるかわからなかったので、全員が事情を知っているわけでもないのならば、このまま自然に帰る流れに持ち込めば、櫛もなにも言わないだろうと賭けに出たのだ。

こんな私情を持ち込んだ生徒会長にメンバー全員で協力するなど、随分仲がいいらしい。人様の恋愛にこんなに一生懸命なれるなんて、なんて素晴らしい友情。…自分と関係ないところでは。

まあ、生徒会メンバーとしての隠れ蓑でくるんで、響子との交際をフォローしてくれるというのなら、断る理由はなにもない。

正直、櫛のファンやら恋人候補やらの嫌がらせをある程度具体的に想像できる響子としては、この交際は出来る限り秘密裏に、人の目に触れないように完結したい。

どうせ一定期間だろうし、というネガティブな現状分析も正直まだ心の中にあるので、一定期間隠し通せれば、この状況から開放され

るだろうと期待している。

「響子には、まだ權から話があるみたいだから、今日は私先に帰るわ」

玲香はニヤニヤと笑いながら、他の皆と帰っていった。

里中也用事が済んだのか、玲香の後に続く。

ピシヤリと響子にはやけに扉の閉まる音が大きく聞こえた。

振り返ると、權はまだ先ほどの席についたまま、響子を見ていた。

「用事って何かな？」

後ろめたさが出ないように気をつけながら、響子とはぼける。愛想笑いもおまけにつけておく。笑って誤魔化せるものなら、笑顔の一つや二つ安いものである。

そんな響子の様子を見た瞬間、權が「はああああ」と盛大なため息を吐いて、両手の中に顔をうずめた。そのまま手は頭に行き、ガシガシと髪をかきむしる。顔はうつむいたままである。

「響子さんさ・・・、分かっててやったでしょ」

顔を上げた權の顔は、困ったような情けない表情で。眉毛がハの字になって、上目遣い。

美形の困り顔って、なんかすごく訴えてくるなあ。

響子は誤魔化し笑いのまま、見惚れてしまう。

「僕さ、昨日すごく考えたんだよ。響子さん、目立つの嫌いでしょ。人間関係にやたら巻き込まれるのもいやでしょ。だから、隠れ蓑用意したんだ。生徒会室、格好の密室だし」

こんな簡単な設定ですべて誤魔化せるとは思ってないけどさ、と權は続けて響子を見た。

「だから、昨日の返事聞かせてもらって、二人で対策を考えたいん

だ。これからの二人のこと」

真剣なまなざしを寄こす櫂の耳が真っ赤なのを響子は、ちゃんと気づいてしまう。

その意味するところも、きちんと分かっってしまう。

天然少女になりたかったわ、と心の中で遠い目をしつつ響子は現状と櫂の気持ちを受け入れた。

自分と付き合いたい為に、できる限り良好な環境を整えようとしてくれる、その真摯な姿勢を無視できるほど、響子は冷酷ではなかった。

ここまで考えてくれる相手に、生半可な理由でその気持ちを拒否するようなことはしたくない。

「じゃあ、どうしたらいいか対策をたてましょ」

響子が櫂の隣の席に座ると、櫂は昨日の告白を彷彿とさせるような満面の笑みを浮かべたのだった。

「響子さん、最初のやつ、無視したでしょ、わざと」
櫂がおかしそうに言った。

耳の赤みは引いているが、表情は先ほどの表情のままである。うぬばれていいのなら、おそらくは響子にだけ向けてくる、恋する男の表情。

「え、最初のって」

「お付き合いしよう、に対する返事」

昨日から、でも返事してないし、という言い訳を心のなかでしてきたことが読まれているかのようだ。

確信犯的にスルーしていた響子は、一生懸命「なにそれ」という表情を作る。ばれてるかもしれないし、ばれてないかもしれない。素直に表情を出すほどの信頼関係はまだ作られてないから。

「返事が、欲しいな」

断言しているかのような告白だったくせに、しっかりと返事を要求されてしまった。

じっと見つめてくる視線が強くて、合わせることができずに俯いてしまったが、響子はなんとか小声で答えた。

「…はい」

なんだか妙に照れてしまい、顔に血が上るのが分かる。

答えた瞬間に、昨日の後ろ向きな感情よりも、もっともっと前向きな感情が強く湧きおこってきたので、響子は自分の気持ちに少しほっとした。

感情の波の少ない穏やかな高校生活は、とても心地よかったけど。恋愛なんて、小説や漫画の疑似体験だったり、玲香の恋バナだったり、そんなので十分だったけど。

權を見た時に感じるほのかに暖かい感情や、他の男子生徒との接触でドキツとする瞬間の感情を、強く大きく育てようなんて思ったことなかったけど。

それでも。

やっぱりうらやましい時はあつて。

傍からみていたら分かりきっていたような結果に一喜一憂しているのを見たり。

他のことなど手につかない状態になっているのを見たり。

正直、自分がそういう状態になりたくないなあと思ったりしてたけれど。

その経験を乗り越えた姿を見て、ちょっとおいてけぼりな淋しさをどこかで感じたこともあって。

自分ひとりの時間はとても居心地がよくて。

やりたいことも沢山あって。

もちろん受験だって頑張るつもりで。

正直、一人でいる時のような気楽な時間が持てるのかどうか、とか。集中力が続くのかどうか、とか。

やってみないと分からないのだけど。

それでもこの瞬間に感じた前向きな気持ちには、響子が今現在立っている位置から前に踏み出す一步を、後押ししてくれた。

対策会議・導入・

「ばれやすいのは、どこかな」

「学校は完全にアウト、でしょ。正直、生徒会室も危ないと思うわ。まあ、毎回生徒会室の出入をチェックするぐらいになると、ストーカー入っているから、なにしてもダメな気はするけど」

「うーん、宏樹と玲香にたまにいてもらうかな」

「宏樹って？」

「ああ、里中のこと。名前知らなかったの？」

「うん、玲香はいつも名字で呼んでるし。初めて知った。みんなで勉強する日を作る？」

「玲香が勉強？あいつ、一般入試？」

「うん」

「その割にはあまり勉強してないな……」

「……まあ、優先順位の高い他の用事があるみたいだし。あ、私はまっとうな受験生ですから」

「知ってる。最近サッカーの練習見に来ないよね」

「あゝ、玲香が後藤君と別れちゃったからねえ」

「……ついだったんだ」

「あ、いや、そういうわけでもなかったんだけど……。でも一人で行く勇氣は、ない……ごめんなさい」

「……部活もNGか……玲香の次の彼氏に期待だな」

「次のって……」

「じゃあお昼は？どこか誰も来なそうなところ……」

「權くんが教室で食べなくなったら、学校中の女子が探すと思う。正直その捜査網から逃れることのできる場所はないと思うよ」

「……」

「登下校もダメだね。まあ、もともと自転車と電車だしね」

「……土日のデートは、」

「誰にも見つからないスポットで現地待ち合わせ以外にはないかなあ。結構みんな行動範囲広いしね。あんまり出歩かないから、どこで会ったらいいかわからないなあ。王道デートスポットは他のカッブルの目撃情報、玲香から聞くしね」

「…考えとく」

「・・・大丈夫？こうしてみると結構制約多くて、面倒になっちゃうんじゃない？」

「いや、大丈夫。他からチャチャ入るほうがよっぽどキツイ状態になりそうな気がするし」

「そっかあ。それもそうだね」

「まあ、いろいろ状況見て、対応していけばいいと思ってるんだけど」

「そうだね、どうなるか全然わかんないもんね」

「うん、まあお付き合いをスタートするってことが一番肝心だから」

「・・・ありがと」

「ううん、こちらこそ、これからよろしくね」

彼女というひと・玲香の視点・

彼女に初めて会ったのは、高校に入学してすぐだった。

教室から入学式の会場となつてゐる体育館に向かつて廊下を歩いて
いるときに、側を歩いてゐたのが彼女だったのだ。

私はあまり人に対して構えることはないから、すぐになつこり笑つて声をかけた。

新しい学校生活は友達が多いほうが楽しいじゃない？

「こんにちは。私、北中から来たの。中原玲香よ、よろしくね」

彼女は無表情だった顔に、少し驚きの表情を浮かべた。

私はちよつとだけ声を掛ける人を間違えたかと思つた。どこでもあまり人と関わり合いたくない人はいるものだ。そういう人は少し学校生活を過ごせばわかるので、普段はあまり関わらない。けどさすがに初日から判断するのは難しかった。

なんて私の中で考えてゐるうちに、彼女は声を掛けられた驚きから立ち直つたらしい。

次の瞬間に、嬉しそうに笑顔になつて、返事をした。

「ありがとうございます。野崎響子です。桜ヶ丘中の出身なの。よろしく」

最初の無表情から笑顔のギャップはなかなか強烈だった。

自己紹介をして、ちよつとほつとした表情をしていた響子が、人見知りをする性格で、初日の緊張で顔が無表情になつてゐたと知つたのは、1ヶ月後ぐらい後のこと。

私は、高校生活がなかなか良いスタートを切れそうで、とてもご機嫌になった。

野崎響子という人は変わっていた。
なにが、というのは具体的にすぐにはわからなかった。

ただ、彼女の印象を一言で表すならば「落ち着いている」という言葉が適切なのではないかと思う。

一緒に馬鹿をやったり、学生ならではの行事に夢中になったり、放課後をガールズトークで延々とおしゃべりしたり・・・他の友達と過ごす時間となにが違うわけでもない。

くだらないことで馬鹿笑いしたり、後から思えばささいなことに腹をたてたり、彼女と過ごす時間はとても心地よかったけれど。
でも、ふとした拍子に突きつけられる、自分たちとの違い。

彼女は一人行動を嫌がらなかった。

友達がトイレに行くといったら、必ず誰かが「私も」とついていき、移動教室の際には、置いてけぼりをくらわないように、事前に一緒に行く友達をキープ。体育の授業の後は友達同士で身だしなみを確認し、一緒に遅れる。

それが当たり前の私には、響子の行動が始め冷たいとも思えた。

「あ、私トイレ」

「うん、行つてらっしゃい」

「次音楽室だね？」

「あ、私これ読んでから行くから、先行つてて」

「着替え終わってたら先行つていいよ、私遅くてごめんね」

「え、待つてるよ」

「大丈夫。すぐに終わるから」

それでも、私が待つていたい時は待つていたし、一緒に行動すると
言くと響子は特にそれ以上はなにも言わずに笑って一緒に歩いた。
ありがとう、といいながら。

彼女は先を見据えていた。

私など、ぼんやりとしたイメージでしかない人生の道筋が、響子に
ははつきり見えているのではないかと思う時が時々あった。

例えば、バイトの決め方。お金の使い方。彼氏の作り方。時間の使
い方。

全てに主張が見えた。

「バイト、ファーストフードにしたの？時給安くない？」

私が響子の始めたバイト先を聞いて思わず聞いてしまった時。だっ
てそこは、高校生のバイトの定番と言われているが、最低水準の時
給しか提示しないということでも有名な先だったから。

「うん、でもこちらから働く時間がある程度提示してシフト組んで
くれるし、試験期間中は休んでも問題ないって言うし、それに平日
は働きたくないから、週2回でも雇ってくれるところってあまりな
かったの。休みたい時に休めないようなバイトはしたくないし」

だから、時給よりも自分のスケジュールを自分で立てられる先にし
たのだと、何の迷いもなく笑っていた。

「まあ、人見知りを直すいい訓練かなあ、とも思うし」

マニュアルでの対応で、人見知りを直すことなどできるのか、と私
はそのときふと思ったのは余談だろう。その不安が的中して、2年
間もバイトした後には、外向けに見せる顔がばっちり完成されて、
人見知り中に愛想のいい対応ができるようにレベルアップした響子
は、人見知りだと気づかれることなく、愛想がいいがそっけない人
という評価をもらいやすいようになっていた……。

「パーマとかカラーとか、かけないの？」

彼女の真っ黒でまっすぐな髪の話題になった時、髪の色がもう少し明るくなったら彼女のまとう落ち着いた雰囲気も軽くなりそうで、聞いてみる。

「でも、それすると1万円が軽く飛んでいくじゃない？バイトのお金、そこには使いたくないんだよね」

むーっと悩みつつも、響子は答えた。

彼女も自分のイメージを多少は自覚していたので、私のカラーリングした髪などに興味を示していたから、悩んだみたいだ。

最初にその答えを聞いた時、少し以外だったのを覚えている。

なぜなら響子は本には毎月1万を軽く超える金額を費やしているのを知っていたからだ。その思い切りのいい本の購入の仕方を見ていて、お金に対してそんなに計画的に使っているとは思わなかった。

そのときに、でも響子があまり買い食いなどをしないことに思い当たった。

玲香や他の友達が購買部に行く際、本当に欲しいときじゃないと、響子は来ない。雰囲気でなんとなく買う、ということをしていなかった。

彼氏と付き合っていると、響子とダブルデートなどをしてみたくなることもあり、何度か彼の男友達やら、自分の中学の同級生やら、紹介をしたこともある。

響子は最初は渋っていたが、多分私のあまりの熱意に負けたのだろう、何回かボーリングやらカラオケやら付き合ってくれた。

彼女は自分がこう、と決めたら愛想よく振舞うこともできるので、私の顔をつぶさないようにだろう、当日はとてもノリよく付き合ってくれて、紹介した彼がその気になったこともあった。

でも彼女は二人きりで会うようなことはしなかったし、「好きじゃなくても、好きになるかもしれないから、ためしに付き合ってみれ

ば？」という私の言葉にも、苦笑して首を振った。

理由はなかなか教えてくれなかったけど、とうとうある日聞き出すことができた。

いわく・・・「彼と過ごす人生が思い描けないから」

正直、この答えを聞いた時、どこの婚活中のアラサーかと思った。私たち、今高校生ですよ、響子さん。

今のお付き合いでなんで人生まで考える必要があるのかと。彼女も正直、私のような反応が返ってくることはわかっていたようで、少し照れながら理由を説明してくれた。

「だって、好きになったらきつと盲目になるじゃない？そしたら現状が冷静に判断できなくなる。でも恋する状態から冷めたときに、抜け出せない状態になっているのは嫌なのよね。人生を謳歌するために、いろんな意味で今は大事な時だと思うの。だって、恋して勉強しなかったら、大学だって行けなくなるかもしれない。これから大学に行って、社会に出たときには、きつともっと沢山の出会いがあると思うの。そのときに心も体もお荷物を抱えてたくないのよね。だって、高校生なんて青田買いもいいところでしょ？もう少し不確定要素を排除したうえで、恋愛したいなあ。・・・あ、別にお見合いでもいいんだけど」

・・・たぶん、私には半分も彼女の言っていることが理解できてなかったと思う。

ただ、響子がこの分野においては妥協をしない性格なのだろうということは、わかった。

時間の使い方は、私とだいぶ違っていた。

私はいろいろな人と約束をして、もちろんデートだってしっかりする。

すごい時は一日に3件、別の人物とのアポを入れて、次から次へと会って過ごす。もちろん、学校が終わった放課後にだ。

そんな私のスケジュールと対称的に響子のスケジュールは、バイト以外は特に入っていることは少なかった。

聞けば、その日の気分で図書館に寄って帰ったり、本屋に寄って帰ったりして、後は家で本を読んだりしてのんびり過ごすのだという。もちろん、誘えばちゃんと遊びにも出かけてくるし、そういう時は時間を気にせず付き合ってくれる。

響子が言うには、スケジュールがいっぱいだと、窒息してしまうような気分になり、そういうスケジュール帳を見るだけで、疲れてしまうのだそう。

まあ、いろいろとわかるにつれて、全く私と違う性格の響子だったけれど、なぜだか響子は私の親友になった。

いろいろなところで対立してしまうこともあったけど、こうも上手くやっていけたのは、いろいろな場面で響子が譲っていたからだと思う。

自分のことではないと、彼女はある程度対立が表面化したところで、身を引いてしまう。

それは自分の態度で人を傷つけることを恐れているように、私には見えた。

それでも、流行の言葉に身をくるんで、意味の無い言葉をつらつらと言うクラスメートの言葉とは対照的に、率直で核心をつくような言葉が出てくることが多かったから、友達の何人かは、響子のことを「怖い、酷い、キツイ」と倦厭する子もいた。

響子を知っている私には、それは恐らく本を沢山読んでいる響子の言葉が難しい言い回しを含んでいたりでするので、ますます威圧的に聞こえるのだらうとも思えた。

空気を読んで、人の機微にも気を使う友達。

だけど、本人の努力だけではどうしても隠し切れない、自分達とは違う存在感。

自分達の見えていないものを見えているような、その思慮深い視線。それは確実に響子という人物を取り巻いていて、周りの人と彼女を切り離していた。

でも。

その壁を打ち破れる人が現れたかもしれない。

それは、自分と仲のいい男子で。

まさか、高校生で彼女と対等に付き合える人がいるとは思ってなかったけれど。

彼なら、納得。

その可能性は、この間まで存在していなかったはず。

していたら、両方と仲のいい玲香が気づかないはずない。

そして、その可能性が生まれた時期も、たぶん玲香には分かっている。

あんなに、二人とも表面の興味しかなかったのに。

なにがあつたのだろう。

すごく、すごく気になるけれど。

話を聞くのは、もう少し後にしよう。

今は話してくれる内容だけを受け止めて、いろいろ普通じゃない高校生同士の恋愛を見物させてもらうことにしよう。

発見の瞬間・権の視点・

僕の人生は欲しいものは手に入らないのに、似たようなものは押しつけられるような人生だったと思う。いくら似たようなものであっても、欲しいものでなければ、それはいらないものでしかない。

自分をいくらごまかしてみても、それは本当に欲しかったものの違いをまざまざと感じるだけだった。

それでも、いろいろと僕の人生に関与してくる「いらないもの」を排除する方法をだんだんと身につけていくことに成功すると、一応は無難な人生を送れるようには、なった。

僕はいわゆる両親が年をとってから出来た子供で、物心ついたころは父親は大きな会社の取締役の地位にいた。当然待遇が良い分、責任も重いわけで、気がつくと海外出張や休日出勤など家にいる時間はあまりなかったと思う。

お金はあったので母親は僕を私立の保育園にいれながら、子供が生まれる前から続けていた趣味の絵画に打ち込んでいた。小学生になったら、午後はシッターがついて、いろいろな習い事や塾に通った。そんな生活をしていたら、当然親とも疎遠になる。定期的に変わるシッターさんとも、相性がいい人とはそれなりに話しをしたが、親密といえるほどの交流があったわけではない。

折に触れて親切にしようと寄ってくる人は、いた。

その筆頭が父親の姉だという伯母だった。

最初はその親切がいわゆる家族の情からくるものだと思い嬉しかった。ただし伯母が訪問した際に起こる父や母との言い争う内容が徐々に理解できるようになると、その思いは裏切られた。

伯母は自分の夫の事業に必要な金の無心に来ていただけだった。心証を良くしようと僕に優しくしてくれたただけだというのは、援助が

断られた際にひどく冷たく立ち去るその態度で分かった。

小学生になると、家族と親愛の情を交わすことをあきらめ、友達にそれを求めた。

ただしその頃から僕の容姿は他の男子との違いが際立ってきたように、自分が親友だと思っていた男の子が、実は自分にしょっちゅう話しかけてくる女の子が目当てだったと、ある日知った。

女の子は、僕が少しでも好意を示すと他の子たちを優越感を持って見渡し、隣にいる僕をみせびらかした。

僕は彼らに利益をもたらすために側にいるわけではなかったため、彼らの目的が分かってからは努めて冷静に、表面上は愛想良く、しかし一定以上は踏み込ませないようにした。

最初は「ひどい」や「そんなやつとは思わなかった」などと非難していた彼らも、僕が彼らの下心を見抜いているとわかると、踏み込もうとしなくなった。

表面上は愛想よく、しかしこちらの許す以上を求める相手には冷たく付き合うことで、僕の生活の平穩は保たれた。

彼女を見たのは、高校生活が始まって間もない頃のこと。気さくに話しかけてくる玲香の友達ということだった。

彼女達二人が自分の中で他の女子と違う位置にいたのは、そのスタンスにある。

女性が自分に対して積極的に関わってくる時は、自分に何かを要求する時なのだが、それがなかったのだ。

玲香はとにかく恋愛を楽しむ達人で、自分に気の無い相手を対象にすることは時間の無駄だとちゃんと分かっていた。だから、当然自分に対してもなにも求めてこない。

気の無い相手から気を使わないアプローチをされるウザさも知っているようだった。まあ、何があったかは聞かなかったけれど……だいたい想像はついたから。

玲香が僕に話しかけてくる時、彼女と一緒にいることはあまりないようだった。

移動教室の途中とか、偶然のタイミングがほとんどだったと思う。最初に一緒にいる彼女を見て、すぐに彼女が、玲香の他の友達のようにわざわざ僕に近づくタイミングを得るために一緒にいるわけではないことに、気付いた。

なぜなら、彼女の視線は最初、僕のことを素通りしたからだ。その後、玲香が僕と立ち話を始めたことことに気づいて、仕方なく一緒に立ち止まる。（本当に、仕方なく、という感じだった。最初玲香が立ち度まったことに気づかずに、数歩先へ進んで、その後のろろと玲香の側に戻ってきたのだ）

そこで初めて玲香の話し相手に興味が出たようで、チラリと視線を走らせる。

僕の顔を認めた瞬間、ちよつとびっくりした表情だったのを見逃さなかった。いつも女性は僕の顔を始めて見ると同じような反応をする。

けれど。

それだけだった。

テレビの中の芸能人を見るかのような無関心。
ただ、僕が「見た目がいい」と認識しただけの、それ。
だから、記憶に残った。

あとから聞いたところによると、玲香に「あれは誰か」と名前を聞いたらしい。

それ以前から玲香は僕のことを話題の乗せていたらしいのだが、顔と名前がいまいち一致してなかったことが、そこで判明したのだという。

人の顔を覚えるのが苦手、という彼女は、その後も何回か僕の顔を確認したらしい。

それから、彼女は僕の観察対象になった。

観察といっても、そんなにしょっちゅう目にする機会はなかった。そもそも彼女は玲香と仲が良いにしても、四六時中一緒にいるような付き合いはしていないようだし、玲香も友達が多いのであちこちに出没する。

玲香と一緒にいない時は、クラスメイトと話をしていることもあれば、一人席で本を読んでいることも多いようだ。

クラスが違う僕は、必然的にその時間の彼女は見れない。何か用事をつけて、クラスを訪れてもいいのだが、特定の興味を外野に悟られると恐ろしいことになることは、中学時代に嫌というほど経験しているのです、そこまでの行動を起こすことはなかった。

「懼つてさ、愛想いいからハーレム状態だけど、女子に対する態度は何気に冷たいよね」

廊下を歩いていたら時に聞こえた声。僕のことを話題にしているらしい。

それは、玲香と彼女のものだった。

普段人気のない空き教室の中で、二人は放課後おしゃべりと楽しんでいるようだ。

ちらり、と廊下に視線を走らせ、人気のないことを確認した僕は、

そのままそこにとどまる。

盗み聞きなどするものではない、きつと悪いことしかないから。そう思っている、なぜか耳は無心に会話を拾う。

2年たつても全く距離感の変わらない彼女の考えを少しでも知りたかった。

「そうね。隙を見せない態度は、すごいと思うわ」

冷静に彼女が答える。

「隙っていうかさー、もうちょっと回りに優しくしてもいいと思うのよね」

「十分玲香達には優しいと思うけど」

「いや、じゃなくて、私の友達とか…」

「また紹介しようとしたの？」

「あー、うん…」

「もうやめなつていったじゃん。玲香と違って明らかに懼くん、迷惑してるよ」

彼女は普段、自分に話しかけたり、人がいる時には「委員長」と呼ぶ。それ以前は「相馬くん」と苗字で呼んでいた。

玲香と二人きりのときは、「懼くん」と呼ばれているらしい。

他の女子がいきなり名前で呼びかけたりすると「僕達はそんなに親密な間柄だったっけ？」と心のなかで違和感と嫌悪感を感じるのに、不思議と嬉しさが沸き起こる。

それは、多分自分になつていない猫が、ある日突然見せた親愛のしぐさを嬉しく思うのに似ているのかもしれないな、と思う。

自分と親しくなるチャンスがありながら、そのチャンスを見捨てるような女子がいる。自分はそれが気になるぐらい自信過剰な人間だったのだろうか。

「えー、だって出会いは多いほうがいいじゃん。会ってみたいと分らないことってあると思うし」

「それさー、普通の人だったらいいと思うけど、櫛くんはまずいよ。だって、多分親切に話しかけてるだけであつても、自分に気があるとか勘違いする女子多数いると思うし…」

「でも、せっかく可愛い子紹介しようって言うてるのに…」

玲香は自分の恋愛も好きだが、人の恋愛も好きだ。

折に触れて自分の周りの人間の縁結びをしようとする。

それを迷惑だと感じる人間がいることが信じられない。玲香にとって恋愛とは、楽しむものだ。

時折泣いていたり、落ち込んでいることもあるが、すぐにけろつとして新しい出会いの話をする。

そんな玲香の性格を良く知る彼女は、別の切り口で話をしたほうがいいと判断したらしい。

「…みんなに優しくする人って、本当に優しい人じゃないと思うよ」「えー?」

急に変わった話題にきょとんとする玲香。理屈っぽい話や哲学的な話は苦手なのだ。

「だって、博愛主義者って一番身近で大切な人に、冷たい人だと思うもの」

「なんで?」

「だって、他の人にその優しさとか意識とか時間を使っているってことは、本来なら独り占めできるハズの一番身近な人のそれを奪っているってことだよ」

「そうかなー。優しい人なら皆で一緒にいても、特別な人にも優しくできると思うけどなー」

「…そんな器用なことできる人なんていないよ。みんなと一緒になら、

そんなものいらないう。その優しさで氣の無い人まで勘違いさせるぐらいなら、いっそ冷たいほうが、優しいよ」

彼女の言葉はなぜか説得力があった。身近に博愛主義者がいるのだろうか。

「でも、最初から取りつく島もないっていうのは…」

「それは、万が一にも可能性がないってことが、最初から分かっているんじゃない？」

「そうかなー。私ならチャンス欲しいけどなあ。權だってもしかしたらその人のこと好きになるチャンス、逃してるかもしれないし」
玲香は恋愛のことになると、異常なほどの粘り強さを發揮する。勉強にもそれを發揮したらいいのにと密かに思っていることは、本人には秘密だ。

「…たぶん、そのチャンスがいらないんじゃない？私だったら、必要なチャンスに時間使わないと思う」

その彼女の言葉が2年間の答えなのかもしれないと、ドキっとしながら聞く。

「…やはり立ち聞きなんてするもんじゃない、と静かに立ち去ろうとしたときに、自分の心の声を代弁したかのような玲香の問いかけがあった。

「…じゃあ、響子が權と会う機会を作らないのって、必要なチャンスってこと？」

「そんなことないよ。可能性のないのを、チャンスとは言わないでしょ。それに、この現状に何にも不満はないし」

彼女が僕に対して可能性を感じていない。

それは、ちょっとシヨックだったかもしれない。

けれど、気持ちが落ち込む暇も無く聞こえた玲香の聲が、自分の心

を浮上させた。

「懼のこと、好きなんですよ？」

それは問いかけというよりは、当たり前前的事实を確認するような調子だった。

「そうね、好きだわ。期待を抱かせない冷たい態度をとれるところも。たぶん、男性としてもだけど、人として好きなんだと思う」
落ち着いた声の彼女の肯定は、自分が今まで持っているとは思っていなかった感情を自覚させた。

嬉しかった。

心が歓喜で満たされた。

見つけた、と思った。

自分の欲しいもの。似たものでは駄目なもの。
それを手に入れることをずっとずっと望んでいた僕は、この機会を逃すなんてことは、できなかった。

どうしようかと次の行動を考えながら、ひとまずその場を離れたその後、交わされた会話など知らずに。

「人として好きだから、終わりのある男女としてのチャンスはいらないかも。今のままで十分だなあ……」

逃せないチャンス - 權の視点 -

しまった、と思った。

彼女が電話に出ない。

1回目は、もしかしたらと思ったので玲香に電話をして、確認した。やはり彼女は知らない番号からと非通知の着信はほとんど出ないらしい。

今後のためにも、玲香に頼んで、僕の番号を彼女に伝えてもらうことにする。

自分の着信を見て、彼女が不審に思うのは本意ではない。

その後、タイミングを計って、再度電話を試みたが、電話はつながらない。

タイミングが悪いだけかと、時間を置いて2回電話をかけて繋がらなかった結果・・・やっと現実が認識できてきた。

今までハイテンションだった頭がすうつと冷えていく。

冷静になると、今日起こした行動のなかでミスをしたと思われる部分が多々あった。

勝手に一人で盛り上がっていたが、普段の自分では考えられないくらい、周りが見えていない行動ばかりである。

状況を冷静に判断して行動できない人間を、自分は軽蔑していたのではなかったのか。

今日の自分は、まさに、それである。

響子さんの僕への評価は必然的に下がっているであろう、とがつくりと頭を下げた。

「あ…あの、今日はとりあえず、帰るね」

彼女との交際に思いをはせながら、今までなかなか話し込むことができなかった彼女といういろいろな話をしたくて、カフェにでも行こうと誘った僕に対する響子さんの返答である。

少し残念に思いながらも、このまま離れがたくて、「じゃあ、送っていくよ」と提案する。

彼女は、「へ？」と間の抜けた声を出して、僕の顔をまじまじと見てきた。

・・・そんなに予想外だっただろうか。

「ごめん、今日は予定があるから、本当に大丈夫。ありがとう、また明日」

戸惑う僕をしり目に彼女は早口でそういうと、出て行った。

その時は、予定があるのに付き合わせて悪かったな、と思ったただけだったが、電話に出ない現状を踏まえると、あれは僕と一緒にいることへの「No」だった気がしてくる。

よくよく考えたら、彼女は2年間もの間、僕との接触の機会を特に持とうともしていなかったわけで。

自分でようやく気付いた彼女への気持ちと、それに合致する彼女の気持ちに浮かれていて、あまり気にしていなかったが、彼女が人から注目されることを避けていることは、気付いていた。

そんな響子さんにとって、僕の彼女というポジションはかなり居心地の悪いものではないだろうか。

別にうぬぼれなどではなく、純粹に僕の周りにいる人たちが被る影響を目の当たりにしてきたので、どんな展開になるかは、想像がつく。

嫌というほど具体的に。

思い出してしまう。

小学生の頃、男子のように快活な女の子がいた。たしか名前は「みさきちゃん」だったと思う。

彼女は、女子よりも男子と一緒にサッカーや野球などをして遊ぶことが多く、自然と僕ともよく話すようになっていった。

といっても、話題などプロ選手の情報やらどこの小学校の誰が喧嘩が強いやら、まったく色気のないどうでもいい話ばかりだ。

しかし、ある日を境に、みさきちゃんはピタリ、と男子と遊ぶのを止めてしまった。

僕が気付いたのは、男子の中でもかなり遅いほうだったと思う。

みさきちゃんとは他の女の子よりはよく会話したが、それは比較の問題であって、どちらかというと他の男子と仲が良かった。

だから、彼女を最近見かけなくなったな、と思い始めて1ヶ月も過ぎたあたりだろうか。

みさきちゃんと仲の良かった男子から、いきなり校庭の隅に呼び出されて話をされた時には驚いた。

みさきちゃんは、女子のいじめにあっていたらしい。

「權くんは媚を売るために、わざと男の子っぽくしてるんですよ。

他の男子にも色目使ってサイテー」

というのがいじめる側の主張らしいが、はつきりって全くのいいがかりにびっくりした。

自分がいじめの原因になっている、という事態も嫌だった。

指摘されてよく見てみると、あんなに快活だったみさきちゃんは、表情のないおとなしい女の子になっていて、いつも女子の輪から外れていた。

男子と遊ぶことが多かったといっても、やはり女子の輪から外れる

のは、かなり辛かったのだろう。
一部の男子は、いじめを主導した女の子の行動に追隨してもいたようだ。

結局、みさきちゃんと一番仲のよかった男子が彼女をかばって残りの期間を過ごし、学年が上がるとともに、僕とも、いじめを主導していた女の子ともクラスが別になったので、その後は特に登校拒否などになることなく、無事卒業したようだった。

ただ、最後までみさきちゃんが元の快活な女の子に戻る事はなかったみたいだ。

もちろん僕としては、全く意図していない状況に不満だったし、みさきちゃんの窮地をどうにかしたいとは思ってたが、彼女の窮地を教えてくれた男子から「なにもするな」と止められた。

僕が動くと、ますますみさきちゃんの状況が悪化してしまうから、と。

そのときは、情けないことに、ほっとしてしまった。

正直、みさきちゃんに対して、特に遊び仲間以上の感情はもっていなかったし、そのいじめを主導している女子と話すのも面倒だった。彼女に話しかけようとするだけで、事態はもつと混乱し、酷い事になるだろうことは、容易に想像がついた。

僕は彼の忠告をありがたく受け入れ、この件には一切たちることはしなかった。

ただ、いじめをしているグループのことは徹底的に無視をしたが。正直そういうことをする人間に対して、嫌悪感でいっぱいであったが、反応を見せないことが一番彼らにとって好ましくない状況なのではないかと思ったからだ。

君達八僕二トツテ、存在シナイモ同然ノ存在。

そう、分かせたかった。

他人の気持ちを思いやることも出来ない想像力の欠如した人間に、伝わったかどうかは疑問だったが。

なにより、そのことがあってから僕は周りにいる人間をよく観察して動くようになった。

深入りしたらやっかいになる人種、物事を捻じ曲げて伝える人種、都合のいいこととしてしか話を受け取らない人種。そういった人達を徹底的に避けて、一定以上踏み込ませないように、常に警戒を怠らなかった。

もちろん信頼に値する人や僕の状況に関心のない人などいたので、なるべくそういった人たちの中にいるように心がけたが、第二の「みさきちゃん」を作りたくなかったので、特に女子には徹底的に愛想はよくても、対応は冷たくして勘違いさせなかった。

誰とでも一定の距離を空けて接するようになった。

それでも、小さなトラブルは完全になくはしなかった。

「やばい・・・」

血の気が引いてしまう。

今の状況を考えたら、響子さんは「みさきちゃん」以上に危険な状況にあるわけだ。

まあ、高校生、しかも上位の進学校に進んできたような学生が、小学生のような短絡的な反応をするとは思わないが、頭がいい分、巧妙な手段にでる危険性がある。

もちろん僕としては、全身全霊をもって響子さんを守るし、玲香だつて黙ってはいないだろうけど、それでも24時間まったく隙を作

らずにガードするなんてことは、無理なわけで。

そんな状況になったら、響子さんがせっかく気を使って作り上げた目立たない平穏な生活を壊してしまう。

そして、もしそんな状況になったら、お付き合いを止めたいと言いつたされる可能性が高いのではないだろうか。

響子さんはおとなしく、目立たないように気を使っているが、自分の主張はしっかりと通す人だということは知っている。

そんな状況下で言い出されたら、引き止められる自信はない。

どうにか、しなければ。

自分はまだチャンスを手に入れただけだ。

そのチャンスを生かすのも殺すのも、僕次第。

両思いが何もしないでも大丈夫であるなら、カップルは分かれなし離婚などは成立しない。

人の気持ちなど、状況によってどうとも動くもの。

2年間もぼーっと観察するだけで無駄にしていたのだ。

あんなにも気になっていた理由が分からなかったなんて、間抜けすぎる。

ずっと探していたのに。

親愛の情を交わせる相手。

自分の葛藤を見抜ける相手。

見抜いて、本当の自分の気持ちを酌んでくれて、理解してくれる相手。

表面的なことだけでなく、いろいろな思いを語ってみたい。

自分の考えを、どう受け止めて、どう評価するのか見てみたい。

もちろん違う人間だから、全てが理解できるわけじゃない。共感できるわけでもない。

だけど、どうして理解できないのか、どうして共感できないかを語り合うことはできる。

もっともっと知り合いたい。

一緒の時間を共有して、いろいろなことを経験して、感想を交し合
って、ヴィジョンを共有する。

そのチャンスを、手にしなければ。

僕は頭のなかで、状況を分析し作戦を立てると、一番の味方になる
であろう里中に電話をした。

臆病者の主張 1

どうなることかと思いながらお付き合いを始めてみたが、響子の日常生活に大きな変化は訪れなかった。

週三回の生徒会のミーティングとその後の櫂と二人きり、もしくは玲香と里中が加わった状態での勉強の時間。

夕方6時頃にはさよならを告げて、一人で、もしくは玲香と一緒に生徒会室を出て、家に帰る。

生徒会室で勉強をやるか、図書館や家などでやるか、ただそれだけの違い。

だから、ほとんど響子の日常生活に負担はなかった。

ただし、日常生活に負担を感じなくても、気持ちの負担はとても大きい。

櫂と一緒に勉強を始めて響子が発見したのは、櫂と一緒にいる空間の居心地の良さである。

もともと、櫂は入学してから学年トップを独走するほど頭がいい。

響子も学年上位1割程度の位置をいたりきたりする程度の成績なので、勉強の時間はお互いにきちんと勉強をする姿勢となる。

玲香はあまり勉強が得意なタイプではなかったから、一緒に勉強をしても、どうしても最後はおしゃべりになってしまい、だらけてしまう。

塾などには通わず、市販のテキストや通信教育などで勉強してきた響子にとって、初めて得た勉強の同士ともいうべき櫂との時間は、一度味わうと手放したくなくなるような、そんな魅力を秘めていた。

この状況ははつきりいって、響子には脅威だった。

だいたい初めは「付き合うには、周囲からの反発が強すぎて、私には無理」という理由で断ろうと思っていた。

しかし、櫛の配慮で周囲にはこの交際をなるべく悟られないように協力体制を整えてくれた状況に、その理由は使えなくなった。

次は、「付き合ってみたけど、やっぱりいろいろ配慮しなきゃいけないことが多すぎて、ちょっとお互いに疲れちゃうよね」という方向でこの交際を早期で終了できるのではないかと考えていた。

しかし、櫛はこの週三回の放課後しかゆつくりと会えず、カモフラージュとして里中や玲香も一緒のこともあり、しかも会う時間のほとんどが勉強の時間になっている、という状況に全く不満を見せない。むしろ楽しそうである。

一方の響子にしても、居心地がよすぎて一人で勉強するよりもはかどってしまう現状に、とてもじゃないが文句を言える状態ではない。

素の自分を見せたら、早々に失望して「響子さんて、なんだか僕が思っていたような人間じゃなかったみたい。申し訳ないけど・・・」なんて展開になるのではないかと思って、出来る限り他所向けの取り繕った自分ではなく、そのままの自分を見せるようにも心がけた。まあ、付き合っただけにたっとならない今の状態では、さすがに素の自分を見せる限界があるのだが。それでも櫛は特に不興を示すことはない。

この状況に響子はひどく焦りを感じる。

なぜならば、響子の懸念が現実となってしまう可能性が日に日に強くなっていくのを感じるからである。

このまま過ぐすと、響子が意図的に放っておいた気持ち、少しずつ育ってしまう。

全くなにもないのであれば、育つものなどない。

けれど、響子は確かに權に対して好意を抱いていたし、多少誇張をして玲香と恋バナを楽しんでいたにせよ、それは全く無から作り上げた話ではないのだ。

それが恋だの愛だの名前をつけることができる感情かどうかなんて、響子には分かりたくなかった。

そして、これが一番重要な点なのだが。

響子が高校生活で恋愛に重点を置かずに生活して来た理由。恋する気持ちというのを分かるうとはせずに、霞のような存在として放っておいた理由。多分、同じ理由で大学に行っても、同じように過ごすだろうと自分で予想している理由。

それは、響子は自分がいわゆる「重たい女」だという自覚があるからだった。

高校生や大学生なんかじゃ受け止められないぐらいの重量で、恋愛をしてしまっだろう自信がある。

正直、自分がどれだけ重たくなれるか、想像すると恐ろしいくらいである。

なぜ、そこまで自信があるかというと、いくつか理由がある。

響子は趣味の読書ではそれこそ雑食で、ありとあらゆるジャンルの本を読んでいる。小説、ノンフィクション、蘊蓄本、ハウツー本、神話、旅行記……とにかく、少しでも面白そうと感じた本は読んできた響子だが、一番好きなのは恋愛小説である。

それも、昼メロ並に重くてドロドロした話であればあるほど、いい感情移入するのは大体が主人公なのだが、それはあまりに感情移入しすぎて、大体の恋愛本の鉄則である「ハッピーエンド」が自分の感情移入した人物に訪れないと、哀しすぎてそのどん底のテンシヨ

ンをかなりの期間（たいていは同じぐらい感情移入できる他の話を読むまで）引きずってしまうからだ。もちろん小説内の悲しい場面では、日常生活では考えられないほどの涙と鼻水を流し、幸せいっぱいの場合では笑顔になってしまう。卒業式で涙も出なかった響子がある。

以前、敵役のとても魅力的な女性に感情移入してしまって、主人公のせいで失恋した展開になった際には、そこで読むのをやめて、一週間延々と主人公の欠点と敵役の女性の長所をリストにして、新たな展開を想像しどうにかハッピーエンドにしようと悶々と過ごしたものである。結局その小説は最後まで読めずに、本棚の片隅に大切にしまわれている。

空想の人物にそこまで入れ込み、主人公へ非常に強い敵愾心を抱くことに、冷静なもう一人の自分は正直、ドン引きであった。

また、響子は物に執着する性格で、気に入ったものは長く手許に置く。ぼろぼろになったお気に入りの教科書（あくまでも、お気に入りのもので）や絵本、小さい頃好きだったアクセサリー、洋服。自分でも何故と思うのに、どうしても捨てられない。

特に気に入ったものでなければ、躊躇なく捨てていけるのに、自分のお気に入りだと認定したものに對しては、散々迷ったすえに再び仕舞い込んでしまうのだ。

それから、響子はあまり交友関係が広いタイプではない。

正直人付き合いは苦手な気持ち半分、面倒くさい気持ち半分といったところである。

但し、自分で気に入ったと思った人物に對してはそれこそ、素直に心を開いてしまうので、過去にいろいろと傷つくような場面も経験してきている。

響子の不幸なところは、彼女が気に入ったと思っていても、相手が

まさか響子に気に入られているとは思っていないところにあるだろう。

玲香のように近くにいる人物であれば、お互いに気持ちを交わすこともできるが、響子は遠くから人を観察した結果、相手と特に自分が直接関わりをもったわけでもないのに、無意識に心を開いていた、ということがあるのだ。

やっかいなのは、その人物の悪意のない（例えば、「野崎響子？誰それ？同じクラスだっけ？」のような）一言に、自分が傷ついて初めて自分が相手に好意を持っていたことを自覚したりすることだろう。

地味に傷つくので、好意を自覚しても相手には特に関われずに終わることも多い。

しかしながら、そのシーンは胸の中に深く刻みこまれてしまい、ある時ふつと鮮やかに再現されたりする。

そして、その再現でも未だ胸が痛んだりするのだ。

……他にも響子が自分を「重い女」認定する理由がいくつかあるのだが、重要なのはその事実である。

好きになったら響子の心は坂道を転げるように重力に引かれて底の底まで落ちていける自信があるのだ。

その「重さ」を自分の心に抱え込んでしまった時、正直自分がどういった行動をするのか、響子は自信がなかった。

プライドは高いほうであるので、必死に外見はとりつくろうだろう。細かいところに気付いて、想像が遙かたくましく育つことになるだろう。

疑心暗鬼になっても、素直に相手に尋ねるようなことはできないだ

ろう。

そんな自分を自己嫌悪でいっぱいで見えてしまうだろう。相手の意図しない行間まで読んでしまうかもしれない。

必然的に自分に自信がなくなって、もっともつとネガティブになっていく。

そんな自分に相手も魅力を感じないだろうから、別れを切り出されたりする。

果たして、自分は追いつがってしまうのだろうか。周りなど気にせず、失意のどん底といった毎日を送ってしまうのだろうか。

いや、まさかね。想像するだけでも恐ろしい。

高校生や大学生でそんな事態になったら、響子の心と人生は目も当てられないほどのダメージを受けるだろう。

もしかしたら、案外回りには悟られないで「大丈夫」なんて吹っ切ったような演技ができるかもしれない。

でも、一人になったとたんに、いろいろな想いが自分のなかで渦巻いて、絶対に勉強など手につかないだろう。

奈落の底に落ちていく、ネガティブ思考ループに陥るのは響子にとって簡単なことである。

ああ、そうしてなにもかもに投げやりになって、人生捨てちゃうんだろっなあ。

スリラーやミステリー、奴隷をテーマにした歴史研究書、貧困生活者のポタージュ、やくざや夜の蝶の自伝、世界の刑務所めぐりの旅行記。なまじいろいろな知識があるから、具体的に自分の転落人生が何通日も響子の頭を駆け巡る。

なにがあっても刃傷沙汰とストーリーカーにだけはなるまい、と自分を

戒めて、響子は自分の陥った窮地を再び考察する。

このままでは響子の心がたどる道は一つだけだ。
では、どうやったら回避できるのか。

具体的な対策が思い浮かばずに、響子は正直途方にくれていた。

臆病者の主張2

權と過ごす放課後の時間は、生徒会室に置いてある机の隅に二人で座って、思い思いのテキストを解く。

お互いに文系ではあるが、目指す大学や学部が違うので勉強する科目も内容も多少異なってくる。

学校の課題が出た時は里中と玲香も一緒に残り、同じクラスの權と里中、玲香と響子の二人組みで取り組むことが多い。とはいっても、それぞれ權と響子が残りの二人の手伝いをするようなパターンである。

里中と玲香は一人でこなすよりも、遥かに早く正確に終わるので、課題が出ると予定がない限りは残っていた。

カモフラージュとして協力してくれるとはいえ、彼らの時間を無闇に使わせてしまうのは心苦しいので、多少は二人の役に立っているという事実は響子の気持ち的にも正直助かる。

4人で居るときは、とても騒がしくなる生徒会室も、權と響子二人の時間は静かにゆっくりと流れていく。

特に言葉も交わさずに自分のペースで勉強をして、時間がくれば、先に響子が暇を告げて家に帰る。

權はその後、適当に時間をつぶしてから生徒会室を戸締りして帰るのだという。

響子は集中力はあるほうだと自負している。

正直、本を読んだり考え事をしている時に話しかけられても、全く聞こえないことも多い。玲香はそんな時遠慮なく響子の意識を引き戻すので、最近自分のそんな状態を自覚するようになった響子だが、もしかしたら過去、自分の態度が人を無視するように見えて誰かを

傷つけたりしたことがなかったかと、ちょっとだけ心配になってしまった。

そんな集中力で勉強も始めると周りの動きや音が、全く響子の意識には入ってこなくなる。

櫂も同様らしく、勉強の切れ目にふと目を上げると真剣な表情で問題を解く櫂の顔が響子の目に飛び込んでくる。

本当にキレイだなあ。

今まであまり至近距離で見る機会を持たなかった響子は、櫂の顔を見るたびに改めて思ってしまう。

櫂の意識がこちらに向いていないことをいいことに、まじまじと見てしまうことも多々あった。

櫂は恐らく平均的な日本人よりもっと強い黒をした髪をしている。日に当たっても茶色にならない真っ黒な髪。さらりとしたストレートの髪は、少し長めに襟足を掠めているが、他の男子が同じ髪型をしていたら、だらしないと感じるような長さでも、櫂がすると妙にかっこいい。

寝癖などはつけているのを見たことがないので、毎朝ちゃんと身だしなみを整えているのだろう。

寝癖を直すのも面倒で、ちょっとした寝癖があるとすぐに髪を結んで誤魔化してしまう響子とは大違いだ。

櫂の瞳も黒い。そして、普通の人よりも黒目が大きいのではないかと思う。濃くて長い睫に、右の目元にある泣き黒子。きめの細かい肌は、髭の気配など微塵も感じさせない。

神様はなぜ、世の中の女の子達が喉から手が出るほど欲しいパーツ

を男子に与えるのだろうか。

正直、あまりに美人な顔に響子の女性としての自信は日々打ちのめされるばかりである。

響子はあまり化粧をしたり髪型に凝ったりするタイプではないけれど、普通に可愛くなりたいという願望は持っている。

ただ、彼女の分析好きな正確が、櫂のパーツと自分のそれをいちいち冷静に見比べて比較してしまい、必要以上のダメージを作り出すのだ。

想像の中で櫂と並ぶ自分があまりに不釣り合いに映り、思った以上にがっかりしたりもする。

響子は客観的な思いで、櫂とカップルにするならこんな人、などという想像上のキャラクターを創り出して楽しんだりしたこともあったので、その自分の理想と自分自身を比較しなければならぬ状態に、くじけそうである。

美しいが、それでも櫂の整った顔は、女性には全く見えない。

男性を感じさせるのに、美しい。

ちよつとたれた^{まなじり}眦が、櫂の表情をやわらかくして見せて、本当に王子様そのものである。

性格やら人生哲学やら、全く他の条件を勘案せずに容姿だけの好みを論じるのであれば、響子は非常にメンクイだと自覚がある。

芸能人やアイドルやら、特定の誰かの熱烈なファンというわけではないのだが、それでも好ましいと思うのは、綺麗な整った顔立ちの正統派美形が多い。

ワイルド系やら、癒し系やらいろいろメディアが命名して、様々な価値観を創作しようと模索しているが、やはり正統派の美形にはかなわないと思う。

その情報が響子に及ぼす影響は皆無であるから、本人の性格が悪か

ろうが、ゲイの噂があるうが、全く気にならない。
やはり眺めるのならば、美しいものがいいと素直に思っただ。

つまり、櫛の容姿は響子の好みのだ真ん中なのだ。
が。

ブラウン管を通したり、10メートル以上もの距離から眺めたりするのと、1メートルもない距離で自分の側にいるのでは、全く状況が違ってくる。

迫力があるというか、眩しいというか…とにかくなにやら「美」という見えないものが力を持って響子に迫ってくるのだ。

・・・あ。

しまった、と響子は慌てて眼を逸らす。

櫛が顔を上げた拍子に、視線が合ってしまったのだ。どうやら櫛も勉強がキリのいいところになったらしく、別のテキストに移るらしい。

今までは細心の注意を払って、そういった気配を察すると勉強へと戻ることになっていたのだが、櫛の顔を見ながら、ぼんやりとしていたらしい。

完全に視線が合ったのは、時間にして1秒ぐらいだろう。

響子の頭に血が上る。顔が真っ赤になっているのが分かる。

耳がドクドクという血管の音で満たされる。

この状況をどうしたらいいのだろうか。

頭に血の上った状態で、完全にパニックになった響子は、完全にフ

リーズ状態だ。

視線は反射的に逸らしたものの、顔や身体、手は權の方向を向いたまま固まってしまう。

「勉強、終わったの？」

響子は何も言えない状況なのが分かったのだろうか、權が沈黙を破ってくれる。

顔が見られないので、確かではないが、声が多少の笑いを含んでいるような気がするの、響子の気のせいなのだろうか。

「うっん、次は何を勉強しようかなーなんて、考えてた」

視線を逸らしたまま、嘘をつく。

素直に權の顔に見とれていましたなどと、言うような可愛らしい性格はしていない。

本来であれば、響子は嘘をつくのはかなり上手いほうだ。

視線を合わせて真顔で嘘をついたり、全く心当たりが無い振りをし、興味を示さなかったり、いろいろな工作をして弟達に対しての絶対権力を作り上げてきたし。

大人たち相手に、礼儀正しい子供として振る舞い点数を稼いできた。

やっかいそうなクラスメートに、自分は無害なのだとさりげなく伝えたり。

様々な状況をコントロールして生きてきた自負がある。

それなのに、權が相手だと調子が狂う。

第一、自分の顔はこんなにも色を変えるものだったのかというぐらい、赤面している気がする。

過去2年間の、顔見知り程度の関係であれば、いくら權相手であつ

ても大丈夫だったのだ。

事実、生徒会で臨時メンバーとしてまれに関わった際も、權にも回りにも權への好意を悟らせなかったし、露ほどの興味も見せなかった。

響子の精神を不安定にさせるのは「両想いで付き合っている男女」であるという設定が二人の間にあるという事実である。

それを無視できるほど、響子は能天気な性格でもなければ、なにも考えない性格でもない。

むしろ必要以上に考えてしまう性格だと、胸を張って言える。

權に自分の「恋心」というものを認定されてなければ、あの告白だって展開が違っていたはずだし、普通の自分の気持ちを尋ねてくれるような告白であったとすれば、特に想ってもいなかった相手から好意を上げる多少の困惑の演技とともに、お断りの台詞を上手に言えたはずである。

あまり興味を惹かれていないフリは、響子の得意技の一つだ。

あからさまに嘘をついている響子のそぶりに、權は多少の懸念をにじませて、聞いてきた。

「・・・こういう時間は、迷惑だったかな。普通の学校生活で二人きりになるのは状況的に難しいから、放課後に二人で過ごせるのはすごく嬉しいんだけど。無理させてた？」

權の懸念の表情が、だんだんと深刻さを増していく。

台詞自体は状況打破の為に利用できそうな内容であるのに、その表情を見てしまうと響子は「もう少し会う頻度を減らそうか」などとは言えなくなってしまう。

ちなみに、權の表情はちらちらと目線を泳がせる間に盗み見ている響子である。もちろん視線が合うのが怖くて目は見れないので、口

元やらおでこやら、耳やら、とにかく確認できるパーツからの情報を総合的に判断して、櫂の顔色を読んでいる。はつきり言って響子にとっては非常に難しいスキルだ。櫂の表情が深刻になったと思っただが、正確に判断できている自信はない。

ただ、沈んでいく声のトーンから、間違っではないと思う。

その状況にひたすら焦る響子は、先日とことん自分の心の中でした反省会の内容を全く活かしきれない行動に出た。つまり。

「ううん。そんなことない。一人でやるより勉強がはかどるから、むしろありがたい、みたいなの。うん、本当に受験勉強はかどってるよ。櫂くんと一緒にいっぱい勉強したら、志望校、楽勝かもね。図書館の学習室より居心地がいいなんて、びっくり」

櫂の落ち込んでいる空気をそのままにはしておけず、フォローを全力で行ったのだ。

冷静な響子の一部は、あわてて口走る自分の台詞を聞きながら、なんだかデジャヴを感じる展開だな、と冷や汗をかいていたのだが。口にした言葉は回収することなどできず。

「よかった。実は休日も一緒にいたら嬉しいな、と考えてたんだよね。たぶん響子さんが気に入ってくれる場所があるから、ぜひ明日デートしようよ。あ、もちろんちゃんと対策は練ってあるから安心してね。勉強、土日頑張ろうね」

櫂が笑顔になって、響子に告げた。

その笑顔が、櫂のオーラを2倍増しにしている。つまりは、迫力2倍増した。

響子はもちろん目など合わせられないが、その事実を誤魔化すために自分も目を細めて笑顔を作り、コクコクと頷いていた。

自分の危機的状況をさらに悪化させていることは理解していたが、それよりもなによりも、今この状況をなんとかしたかった、というのが本音である。

もちろん、なんとかいつも通り生徒会室を一人で出た瞬間から、初デートに対する自分の中の葛藤やら、「なにを着ていけばいいのー」という乙女な悩みやら、權の笑顔が自分の心を与える影響力についての考察やら様々な思考が頭をぐるぐると駆け巡っていたのは、言うまでもない。

臆病者の主張3

初デート、である。

人生初、權とのお付き合いで初、である。

昨日の夜、いろいろな思いが頭を駆け巡りなかなか眠れなかったにも関わらず、朝早くから目が覚めた響子は、女性誰もが直面する難問に頭を抱えていた。

何を着たらいいんだろう。

デートで着用する服装である。

普段制服で過ごすことが多い女子高生とはいえ、年頃の女性として、それなりに洋服は持っている。

ただし今まで交際をするという選択肢が、響子の中には無かったため、服を購入する際には、響子が気に入ったかどうか、似合うかどうか、女友達からも認めてもらえる程度のセンスだろうか、などという基準で選んでいた。

響子は基本的に楽な格好が好きだ。ただし「可愛らしい」という表現に憧れのようなものを持っているので、楽な中にも可愛いディテールが加えられているような洋服をよく選ぶ。

Tシャツよりはカットソー。ジーンズよりはワンピース。

他人が持つ響子のイメージよりは、乙女が入っているかもしれない。

友達と出かける時は、大体おしゃれして行くのでワンピースが多い。ただし今日は勉強をするので、スカートだと集中できないかもしれない。

勉強が目的なのに、あまりに可愛らしい格好をして行くと、なんだかデートに張り切りまくっているように見える可能性がある。

あまりに乗り気な印象を与えてしまうと、その誤解のままの空気でも過ごすのはかなり辛そうだ。

心配の内容が多少捻くれているが、悩むこと一時間。

結局、ブルーデニム調のワイドパンツに、胸元にリボンのアクセントがあるフレアブラウスを組み合わせることにした。

足元は疲れないようにバレエシューズにする。

ただでさえ年齢よりも上に見られることの多いのに、メイクをするさらに老け顔になる響子は、日焼け止めとオレンジのグロスをつけるだけにする。

髪の毛は、学校に行くわけでもないのに、邪魔になっても特に問題ないだろうと下ろしたままだ。念のためヘアクリップをバッグに入れた。

ある程度の融通が利くように多少のバリエーションを持たせてテキストなどを用意すると、待ち合わせの時間に十分間に合うように家を出た。

響子は多少方向音痴気味であることを自覚しているので、用心したのだ。

待ち合わせの10分ほど前には到着しているのが、いつもの行動パターンである。

櫛の指定してきた駅は、櫛の家の最寄り駅の隣駅だった。学校で普段利用する駅からは、ちょうど4駅ほど離れている。響子の家は櫛の家とは逆方向なので、家から向かうと20分強の時間、電車で揺られていることになる。

学校はいろいろな地域から学生が集まっているので、もちろん駅での待ち合わせなどできない。櫛の家が近いということで、女子はい

つ櫂を目にするチャンスがあるかもしれないと、意識している可能性も高い。

事実、毎週ではないが、休日に櫂を見かけた女子の噂話が、翌週には全校を駆け巡っていることがある。

どこで見かけたのか、服装はどんなだったのか、誰と一緒にだったのか。

王子様にプライバシーという言葉は無いのだなあ、と同情気味にクラスメートがする噂話を聞いていた響子だが、いざ自分もその標的になる可能性が高い立場になってみると、恐怖以外のなにものでもない。

自分の一挙手一投足が見られているかもしれないという状況は、ストレスが溜まり過ぎる。

響子なら家から出なくなってしまうかもしれない。

指定された駅で降りるのは、初めてだった。

特に大きな駅でもないのに、用事などで来ることもなさそうだ。

櫂から言われなかったら、響子とは一生縁のない駅だったかもしれない。

住所を携帯に登録して、ナビを使いながらゆっくりと歩くと、ほどなくして櫂の指定した店の前についた。

そこは、個人経営の喫茶店のようだった。

気軽に入れるチェーンのカフェが乱立する昨今、響子は個人の喫茶店に入ったことなどない。

友達とおしゃべりするのも、周りを気にしないでいいような店が気

楽でいい。

入らないと雰囲気もメニューも分からないような店は、響子には正直敷居が高かった。

それでも今日は櫛から指定された店であるので、響子は「コンフォート」という店名を確認して中に入った。

カランコロン。

なんか懐かしさを感じる鐘がドアから響く。

扉を開けて響子が店内へ入ると、カウンターに居るオーナーらしき人が「いらっしやいませ」と心地よいテノールの声で迎えてくれる。オーナーはおだやかな笑顔が素敵な白髪のかなり年配の男性だ。恐らく響子の親よりも年配で、どちらかといえば祖父の年代のほうが近いのかもしれない。響子は年配の方の年齢はあまりよく分からないので、あまり判断に自信がもてないが。

オーナーに会釈をすると、響子は店内を見渡す。

カウンターの8席とテーブルが5つ。広くもないが、狭苦しい印象はないほどよい広さに見える。

客はカウンターに2人とテーブルに2人いた。まだ9時なので、皆モーニングセットらしきものを食べているようだ。

櫛が見当たらないので、響子はしまったと思った。

時計を見ると待ち合わせの時間よりも15分ほど早い。遅れないように早めに出てきた分、スムーズに到着したので、早すぎる到着になってしまったのだ。

こんなことなら商店街を覗いて時間をつぶしてくるんだった、と響子が心の中で反省しながら、オーナーに待ち合わせであることを告

げようとしたとき、櫂の声がした。

「響子さん、こっち」

カウンターがカーブしている奥から声がしたようで、響子は再度そちらに眼を向ける。

すると、観葉植物にさえぎられてスタッフ用の出入り口しかないように見えた場所に、もう一つテーブルが置いてあることに気付いた。櫂はその奥に座っていたようで、入り口からは全く見えなかった。

「あ、櫂くん。おはよう」

「おはよう。響子さん早かったね」

「道に迷うかと思って早めに出てきたら、案外ちゃんと来れたみたい。櫂くんこそ、早いね。まだ到着してないかと思って、焦っちゃった」

「喫茶店の待ち合わせだから、先に居ても全然苦にならないから、早めに居たんだ。あ、紹介するね。こちらオーナー。オーナー、話しておいた響子さん。これから週末二人で長居させてもらうと思うんで、よろしく」

カウンターに居るオーナーと響子を紹介すると、櫂は響子に席を勧める。

「奥のあまり人から見えない場所は、僕が座ったほうがいいと思うんだ。本当は女の子に譲るべきなのに、ごめんね」

櫂は先ほどの見えない位置に座りながら、右の直角の位置に座る響子に謝る。角の席なので向かい合って座るのではなく、直角の位置に椅子が2個置いてあるようだ。テーブルはすごく大きいわけではなかったが、お互いに譲り合って利用すれば十分テキストとノートが開けるスペースがある。

「うつん、櫂くんが見えない位置にいるほうが、私も安心するから」

響子は權と顔を見合わせて苦笑する。昨日のように変に強く意識しなければ、そこそこの權の顔も見ることができる。但し、響子が「変な意識」を強い意志で押さえつけている状態であるのも事実なのだが。

「いいでしょ、この鉢植えが絶好の位置にあるんだよね。過去2年間ばれてないから、大丈夫だと思うよ」

權はこの喫茶店の常連であるらしい。よく来るのだという。

そんな状態なのに、確かにこの町で目撃されたような噂は無かった気がするので、響子は安心した。權の言うとおり、安全だと思ってよさそうだ。

「コーヒーでいいかな？ホット？」

權に聞かれてたので、ホットコーヒーを頼む。權がオーナーの所に言って2人分の注文をして戻ってくると、早速二人で勉強の支度をする。

「ここでよく勉強してるの？チェーンのカフェだと土日勉強ダメだったりするから、こういうところはもつとダメだと思ってた。初めて入るけど、居心地よさそうだね」

響子は店内をきよきよと見回す。店の窓はスモークガラスで權達の席側には無いが、入り口の脇に2個それぞれついている。

窓際の席は、その明かりだけでも十分なほど明るい。

カフェカーテンが今は端に寄せてあるが、明るすぎる時はそれを引いて調整するのだろう。

カウンターと奥まっているこの席の上には、それぞれ小さなランプが釣り下がっている。

ちょうどチューリップを逆さにしたようなランプで、暖かいオレンジ色のライトがついている。

蛍光灯のような煌々とした明るさはないが、読書やテキストを読んだりするには十分な明るさだった。

「そうでしょ。特にこの席がお気に入りで、常連になるからって確保してもらってるんだ。最近は朝から晩まで入り浸ってるよ」

權が笑った。

「あまりいいお客じゃないんだけどね。オーナーの人気があるほうが客も入りやすいって言葉に甘えさせてもらってる」

確かに、この奥まった席じゃ人気もなにもないだろう。

それでもいいと言ってくれるオーナーは、權をよっぽど気に入っているに違いない。

そういう居場所を作れる權はすごいな、と響子は尊敬してしまう。個人経営の店は、人見知りをする響子にはいつも行くのに勇気がいるのだ。

「そっかー。私もいいお客さんになれない気がするけど、いいのかな？」

「僕が一人で占領してた席に2人で座ってるんだから、単純に効率2倍でいいんじゃない？響子さんが来た分だけ儲かるんだから、気にしない、気にしない。あ、コーヒーできたみたいだ」

權はコーヒーをもらいにカウンターへ向かうとオーナーと二言三言、言葉を交わして戻ってきた。

「ブラックはダメだったよね？クリームと砂糖どうする？」

生徒会室で、權の飲むブラックコーヒーを見たときに出た話題を覚えていたらしい。

「あ、クリームだけで」

響子はコーヒーを受け取ると、一口飲んでみる。

家で飲むよりも、深い味わいがする。それでいて酸味が少ないようだ。とても飲みやすい。

「おいしい・・・」

思わず出た言葉に權が「オーナーのオリジナルブレンドだよ」と言ってから、お盆を返しに行ったついでに、オーナーに今の言葉を伝

えたらしい。

オーナーはにつこりと笑って「ありがとうございます」と言った。

響子は慌てて席を立つとオーナーの側まで行ってカウンター越しに「あの、こちらこそ、ありがとうございます。ご迷惑おかけしますが、よろしく願います」と頭を下げてきた。

響子としては、權が気にするなと言っても、やはりちゃんと挨拶をしておきたかったのだ。

タイミングを計っていたので、今を逃したら・・・と響子には思い切った行動だった。

「気にしないで大丈夫ですよ。ご覧のとおり、常連には年配の方が多いので、若い方がいるとお店が華やぎます。静かに勉強されるなら、他のお客様の迷惑にもなりません。勉強頑張ってくださいね」オーナーの優しい言葉にほっとして、響子は席に戻った。

カウンター席の常連さんがオーナーの言葉を聞いて「年配とはひどいなあ」とこぼしていたので、そちらにも笑って会釈をする。

彼は「・・・まあ、店が華やぐのは確かかな」と言って響子に笑い掛けると、オーナーともう一人の常連らしき客との会話に戻った。

「よかった。皆いい人だね。・・・勉強に誘ってくれてありがとう」デートに、とはちよつと言い辛かったので、安全な言い回しでお礼を言つと響子は權と共に勉強を始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0134x/>

格差恋情

2011年10月7日15時50分発行